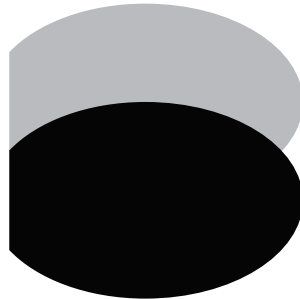


20250820

絵本学会 NEWS No.82

発行：絵本学会
発行日：2025年8月20日
編集：絵本学会広報委員会
絵本学会事務局：〒100-0003
東京都千代田区一ツ橋1-1-1 パレスサイドビル9F
(株) 毎日学術フォーラム内
電話：03-6267-4550
Mail：maf-ehongakkai@mynavi.jp
HP：http://www.ehongakkai.com



絵本学会

- ・第28回絵本学会大会報告
- ・2025年度第28回定期総会議事録
- ・2024年度活動報告
- ・2025年度活動計画
- ・2024年度決算報告書・財産目録
- ・2025年度予算
- ・企画委員会からのお知らせ
- ・紀要編集委員会からのお知らせ
- ・研究委員会からのお知らせ
- ・日本絵本研究賞運営委員会からのお知らせ
- ・絵本学会理事会議事録
- ・会則変更 ・告知 ・寄贈資料
- ・新入会員自己紹介 ・編集後記

■ 第28回絵本学会大会報告 ■ 実行委員長 松本 猛

2025年6月21日(土)22日(日)の2日間にわたって、第28回絵本学会大会が、横浜市開港記念会館で開催された。第27回大会がオンライン大会だったこともあり、対面開催の横浜大会は近年になく多くの参加者があり、総数は431人に上った。内訳は、会員、準会員(院生など)149名、学生(学部生)38名、一般244名だった。参加者が例年よりはるかに多かったのは、谷川俊太郎追悼企画と荒井良二スペシャルトーク企画という絵本に興味のある人にとっては見逃せないイベントが初日にあったことと、事前の広報活動を大会事務局が熱心に取り組んだ結果だろう。

今回のテーマは「絵本の窓から世界を見る」。横浜市開港記念館という会場を借りることも意識して、絵本が世界に開かれた窓でもある、という意味を込めた。実際、絵本は「絵」という世界共通言語を基本とするために、国際理解を推進する文化としても注目されている。また、近年、絵本のテーマは「生き方や思想」「戦争と平和」「人権・差別」「自然と地球環境」「東日本大震災・原発」など現代社会との関連の深い内容が語られるものが増えている。ラウンドテーブルのテーマはこうした状況を念頭に置いて決定された。谷川俊太郎追悼企画や荒井良二トーク企画との関連でも、谷川氏が翻訳した絵本は数多くあり、近作には『へいわとせんそう』(Noritake 絵)もあり、哲学的な内容を持った絵本も少なくない。荒井良二氏の『あさになったので まどをあけますよ』は東日本大震災の現場に足を運んだことから生まれた絵本であり、その後の絵本の中で荒井氏は人間社会、地球を考える絵本を次々と制作している。「絵本の窓から世界を見る」というテーマは絵本が多

様なテーマを語る表現という意味をアピールするものである。

谷川俊太郎追悼企画では、「谷川俊太郎絵本★百貨展」の企画者、林綾野氏をコーディネーターとして、ご子息の賢作氏と、谷川氏と夫婦でもあった佐野洋子氏のご子息でもあり、谷川氏と絵本も制作した絵本作家の広瀬弦氏を迎え、谷川絵本と人間について突っ込んだ話が展開された。また、賢作氏の演奏もあり、追悼企画としては充実したものになった。

荒井良二トーク企画は「荒井良二の魅力を解明する マーガレット・ワイズ・ブラウンや長新太から何を学んだか?」と題して、筆者が聞き手に立った。荒井氏が若いときに興味を持った絵本に触れながら、1970年代80年代時代の絵本と文化についても語り、絵本作家荒井良二が表現しようとする世界に踏み込んだ。

ラウンドテーブル①「絵本でつながるケアとインクルージョン」では、この分野で実践と創作をしている村中李衣氏をゲストに招き、さまざまな人たちとの関わりの中で絵本が本質的に持っているケアの力を見つめた直し、その可能性を考えた。②「科学絵本について」は現代絵本の中でもっとも発展した分野でもある科学絵本について、この分野に新しい切り口を提示した絵本作家の館野鴻氏を招き、制作の実態を語ってもらった。③「ブルーノ・ムナーリの絵本の独創性」ではムナーリ研究の第一人者である岩崎清氏をゲストに、視覚言語を用いた絵本表現の可能性について考えた。

研究発表では8名の発表があり、作品発表は3名の作品が展示された。また、企画展示「教育現場の絵本表現」では筑波大学、東京成徳大学、静岡文化芸術大学、横浜美術大学、

京都芸術大学の学生、卒業生による絵本作品が展示された。

第1日目の閉会後には「ウェルカムイベント 懇親会+朗読会」が会場近くの象の鼻テラスで開催され、会員と一般参加者を含め126人が参加した。俳優の水野真紀さんによる谷川俊太郎の詩の朗読もあり、楽しい時間を共有した。

全体を通しての司会は絵本専門士でもあるフリーアナウンサー野田英里さんが務め、スムーズな進行ができた。書店、出版社、学生アルバイト等、大会を支えてくれた関係各位に感謝の意を表したい。最後に、実行委員会事務局長の穴澤氏を筆頭に実行委員諸氏の献身的な努力があって、大会が成功したことを付け加えさせていただきます。



横浜市開港記念会館



懇親会

第28回絵本学会横浜大会実行委員会 (敬称略)

実行委員長

松本 猛 (絵本学会会員)

実行委員

穴澤秀隆 (絵本学会理事／実行委員会事務局長)

有福一昭 (絵本学会会員)

佐藤博一 (絵本学会理事)

竹内美紀 (絵本学会理事)

辻 政博 (絵本学会会員)

博多哲也 (絵本学会会員)

原島 恵 (絵本学会会員)

松本由美 (絵本学会会員)

正木賢一 (絵本学会会員)

水島尚喜 (絵本学会会長)

宮崎詞美 (絵本学会理事)

森 景子 (絵本学会会員)

劉 娟 (絵本学会会員)



特別追悼企画 谷川俊太郎と絵本

第1日目 6月21日（土）12:10~14:30（講堂）



谷川賢作氏のピアノ演奏



左から広瀬弦、谷川賢作、林綾野（敬称略）

谷川俊太郎氏が、2024年11月23日に逝去された。氏の幅広い創作活動は、多くの人々の人生に寄り添いながら、愛されてきた。とりわけ絵本は、120冊と言われている詩集の数を超えて、約200冊が刊行されているという。この追悼企画では、「谷川俊太郎と絵本」について、関わりの深い方々に御登壇いただき思いを語っていただいた。

冒頭30分は、ご子息の音楽家谷川賢作氏による追悼パフォーマンスが披露された。自らがオープニングアクトと称されたこのパートでは、谷川俊太郎『クレーの絵本』から選ばれたクレー作品がスクリーンに映し出され、賢作氏の朗読と歌、ピアノによる演奏で進行的した。「惚れた女のための風景」「階段の上の子供」「ケトルドラム奏者」「まじめな顔つき」「黒い王様」

「猫と鳥」「黄色い鳥のいる風景」「死と炎」「黄金の魚」といったクレー絵画にインスパイアされた谷川俊太郎の詩作と、存在感溢れる賢作氏の音の調べが一体となり、緊密で静謐な空間が現出された。彫りの深いピアノのタッチが実に印象的であった。

パフォーマンスの終了後、賢作氏は『クレーの絵本』の後書き「魂の住む絵」から「クレーの絵は抽象ではない。抽象画には精神は住めても魂は住めない。言葉でなぞることは出来ないのに、クレーの絵は私たちから具体的な言葉を引き出す力をもっている。若い頃から私は彼の絵にうながされて詩を書いてきた。ちょうどモーツァルトの音楽にうながされてそうしてきたように。「詩」は言葉のうちにありよりもっと明瞭に、ある種の音楽、ある種の絵のうちにひそんでいる。そう私たちに感じさせるものはいったい何か、それは解くことの出来ない謎だ。（後略）」を紹介し、ご自身とご尊父の創作へのスタンスを重ねるかのように語った。

次に、谷川俊太郎の絵本の企画展を手がけてきたフリーキュレーター林綾野氏、多くの谷川絵本の作画を担当した広瀬弦氏、そして父と詩／音楽のコラボを行ってきた賢作氏が登壇し、林氏のナビゲートで進行的した。鼎談は「（賢作氏曰く）何となく“絵本”が通奏低音」となって、サイドストーリーから哲学的考察まで、変幻自在のマイクロマクロの往還があった。以下に時系列で要点を紹介する。

- ・谷川俊太郎は、母、伯母に溺愛されて育った。父徹三氏とは「君子交わらず」の関係性。
- ・賢作氏は父の創作現場に居合わせたことがあまりない。また、父の絵本を意識したのは、『けんはへっちゃら』（あかね書房1976年復刊）から。日常的に詩や文学、音楽に関わる話はしなかった。気の効いた話をしておけばよかった、との思いを持っている。
- ・佐野洋子を母に持つ広瀬弦氏は、中学校の頃が俊太郎氏との最初の出会い。当初、母の恋人という感じで受け止めていた。
- ・林氏は、全国巡回展「谷川俊太郎絵本★百貨展」の企画者。「谷川俊太郎絵本展」としてしまうと、回顧的側面が強くなる。現在進行形の谷川俊太郎を知りたいとの思いから新作『すきのあいうえお』を用意した。谷川氏が好きなもの、好きな言葉を「あ」から「ん」まであげていき、写真家が全国を旅して写真を撮ったもの。谷川俊太郎の心のリアルが見える内容となっている。
- ・せっかちでマイペース。原稿執筆の速度は、異様に早い。しかし、最晩年は、ラップトップを開けても「ボー」として過ごす時間が長くなった。
- ・本人の口調を真似た朗読や、詩に一定の意味を見出そうとする風潮に批判的。自由な作品へのアプローチが大切だと考えていた。

- ・広瀬弦氏との仕事では、一般的な物語絵本ではない、特定のコンセプトをもとに展開するアプローチが紹介された。『くあちゃんから絵本 まり』（クレヨンハウス刊）は、当初広瀬氏の絵と谷川氏の詩作「まり」のコラボに出自があった。その後のやり取りの中で、詩の言葉が単純化され、広瀬氏がアニメーション風の印象的な絵本にまとめ刊行。作品のクリエイティビティを尊重する中で、絵と言葉の柔軟な関係性を求めた。広瀬氏は「まり」というタイトルについて、『「まり」って、今言います?』と独特のユーモアで自評し、賢作氏は、『まり』は名作『もこもこもこ』よりも有名になってよいのでは、と高く評価した。
- ・絵本の創作プロセスでは、柔軟に作画家に対応し、詩作の推敲も行っていた。反面、再版の際の書き直しについては批判的で「直すくらいなら新しいものを書いたほうが良い」というスタンスであった。
- ・車好き。最初の自家用車は「シトロエン 2CV」、最後は広瀬氏から紹介された「フィアット 500」。近所のセブン・イレブンに牛乳を買いに行ったことが、自身での最後の運転となった。（以後、賢作氏にキーを取り上げられた。）
- ・2023 年9月1日から車椅子生活となった。それ以前は、自宅で頻繁に転倒し、体じゅう痣だらけであった。そのような状態であっても、激昂することなく平然としていた。
- ・「谷川俊太郎絵本★百貨展」での展示の工夫や、540 ページに及ぶ展覧会カタログにまつわる苦労話が、林氏から紹介された。カタログの構成を担当した刈谷政則氏は、絵本出版当時のインタビュー原稿を残しており、絵本刊行当時の谷川氏の意図がわかる貴重な資料となった。林氏はそれらを読み込む中で、「自在に言葉を操る魔術師谷川は、何でもできるから絵本を作っていると思われがちだが、実は絵本でしか出来ないことに、毎回チャレンジしていた」と、氏の実験的精神を開示した。
- ・絵本として最初に刊行された『絵本（的場書房、1956）』は、ビジュアル（写真）と言葉でしか表現できないことを意図した内容。使用した写真は、武満徹などの親しい人の手を谷川氏自ら撮影したもので、300部限定の自家出版。賢作氏も、実物を家で見ることがなく、展覧会に出品されている現物は、刈谷氏の所有物で貴重。ただし、当時求められていた絵本とはかけ離れた内容であった。
- ・『まるの王様（1971）』は福音館の「かがくのとも」の一冊として出版された初の商業絵本（認識絵本）。続く『こっぶ』『なおみ』は写真絵本としても画期的。（が、『なおみ』は、掲載されている人形が不気味と受け止められ、大変不評であった。）
- ・最晩年は、様々な絵本の企画が持ち込まれたが、ほとんど断っていた。
- ・「かっぱ」などが収められた『ことばあそびうた』は、詩人として精力的に取り組んだ絵本。1970 年の「母の友」の連

- 載から始まった。自分の詩で暗唱しているのは「かっぱ」だけというエピソードが賢作氏から披露され、言葉の韻を踏みながら遊び心で音を楽しむことに熱心であった。
- ・手書きよりも、ワープロでの執筆と相性が良かった。詩は手書きという先入観を持った周囲は、そのことに驚いていた。逆に広瀬氏は、一見コンピュータを使用しているように見えるが実は手描き。刈谷氏の編集になる『イソップ詩』では、詩が最初にできていたが、広瀬氏の絵の完成は15年後（?）となった。（その後、賢作氏から、詩よりも絵のほうが大変であるとのフォローが入った。）
- ・1966 年からアメリカ、ヨーロッパを旅し、「詩の朗読会」に出会う。そこでは「場」というものに詩があり、詩は、「音声メディア」であるという自覚を持った。結果、読みの意味解釈よりも、音そのものを楽しんでほしいという思いが強くなる。そのことがオノマトペ絵本『ぴよぴよ』や言葉あそび歌につながっていく。絵と言葉の豊かな響き合いが絵本では大切であるとの認識となる。
- ・詩はミニマルなものであり、絵本は作画者との共同制作でもあるとして、作画への最大のリスペクトを持っていた。常に絵と言葉のバランスを考えてくれ、広瀬氏はその点で仕事がしやすかったと述べた。
- ・方法論的なシステム（コンセプト）を創出するのが好きで、例えば赤ちゃん絵本作成の際に、「食べられる紙で作れば」とのアイデアを編集者に出した。一方では、文脈的に意味のない音を「言葉の調べ（音索性）」として重要視していた。「無意味」の意味を知っていた。その例を紹介するとして、賢作氏は、筒井康隆風文体の「おめざ」という散文を紹介した。脈絡のない内容に意識を少しずらすことによって生じる関係性の妙を、林氏は指摘した。（が、過大評価ではないかとの指摘が直後にあった。）
- ・広瀬氏は、肯定的な評価ばかりの谷川作品と共作することについて多少のプレッシャーがあったと述べる。一方、賢作氏はどの自作品も褒めてくれた、と身轟然な一面を披露。さらに「何で詩の時には拍手がないのに、歌の時には拍手があるの?」が、常套句であったとも。詩作のみならず、アクティブなライブ朗読も好んでいたことを明かした。
- ・多くのテーマ性のある谷川絵本の中で「死」をモチーフにした作品がある。展覧会では『かないくん』（絵：松本大洋）と『ぼく』（絵：合田里美）を展示している。それらは一般的な「悲しみ」を基調とした内容ではなく、独特の死生観が展開されている。賢作氏は「わたしはしぬのがたのしみ」で始まる 70 代での詩作「わくわく」を朗読披露した。林氏は「生と死」は表裏一体で同じであるという谷川氏の言葉にリアリティが持てず、展覧会構成に苦労した。ただし、言葉は「美と醜」といった二項対立で構成されているが「世界は二項だけでは説明できない、基本的に世界は無意味であり、生と死も同一である」という氏の死生観に気付かされた。よって谷

川氏の死を嘆いてはいけないことを思ったという。

- ・さらに、賢作氏は、最晩年の父親の様子を看とりながら、生きることの大変さを実感し、父の死に際して「お疲れ様」という思いに溢れたという。就寝時には、「おじいちゃん（徹三氏）はいくつまで生きたんだっけ?」という質問が繰り返され、「94」と賢作氏。続け様「俺いくつだっけ?」「92!」。笠智衆とのやり取りみたいだったとも。死についての興味が、死に対するある種の距離感が、恐怖を超えて希望への扉となる可能性が指摘された。
- ・鼎談の終わり近くには、松本猛大会実行委員長も交え、「死」の解釈に関連して「無意味」をテーマに話が展開した。松本氏は谷川氏の意味難解な散文「おめざ」と、氏が執筆した長新太紹介文とが類似しており、『ゴロゴロニヤーン』などの長作品と、イメージ上の関連があることを指摘。その手法を、賢作氏はアバンギャルドではなく「スラップスティック」、松本氏は（言葉の）置き換え「ディペイズマン」とであると評した。松本氏は、ニューヨーク滞在時に行動を共にした現代美術の巨匠『もこもこ』の作者元永定正が、そこに絡んでいると推測した。絵本を制作する上でどのようにパーツを組み合わせるか、それは形をどのような組み合わせでいくかという美術的空間構成の方法論でもあり、両氏の交流の中に出自があるのではないかと、さらに人智ではコントロールできない動きや形を定位することなどを、連想ゲーム的に二人の間で試行していたのではないかと指摘する。元永氏とのライブペインティングとのコラボ経験がある賢作氏も、ジャズ的インプロビゼーションで形を定位できる元永氏を絶賛。その場にいた谷川氏も羨んでいたという。それを受けて松本氏は、以前の絵本学会の場で谷川氏に「もこもこ」の朗読をお願いしたが、「もーやん（元永氏）の前で朗読はできないよ。」と言って辞退されたエピソードを披露。代わりに朗読した元永氏の読みに圧倒されたことを述べた。両氏ともに、空間や状況の説明ではなく、湧き上がったクリエイティビティに忠実であったことが明らかとなった。
- ・最後に林氏は、谷川氏の「絵本というメディアを舞台に、この時代における表現の可能性を広げた」功績を述べ、全国巡回展「谷川俊太郎絵本★百貨展」のアピールを行い、特別追悼企画を締めた。



＜象の鼻＞での24の質問:「象の鼻テラス」から外を眺める *ウェルカムイベント 朗読会

夕刻より開催された「ウェルカムイベント」では、谷川氏の絵本と詩の朗読会が横浜港に面した「象の鼻テラス」で開催された。

朗読会冒頭、俳優水野真紀さんによって「悲しみ」「二十億光年の孤独」の初期作品二篇が静かに読まれた。続く「ネロもうじき又夏がやってくる」の朗読直前には、突然花火が打ち上げられ、思わぬ偶然の介入に会場が沸いた。「朝のリレー」の読後には、フリーアナウンサー野田英里さんが、言葉遊び歌「かっぱ」の「か」抜き読みで会場を盛り上げた。「＜象の鼻＞での24の質問」では、水野・野田両氏が1行づつ交互に読み合いながら、フロアを巻き込んでの質問へと展開していった。そして最後に、谷川氏の絵本代表作「ありがとう」と「生きる」で会が締め括られた。

会場となった「象の鼻テラス」は、谷川氏が2009年開館時に訪れた際、横浜港の景色を眺めながら「＜象の鼻＞での24の質問」を創作した場。「Q1 この風景に潜んでいるあなたの過去はどんな過去ですか?」に始まり、「Q24 港という場所のどんな所が好きですか?」で終わる質問形式の24行詩が壁面の窓ガラスにプリントされており、谷川俊太郎の世界観が体現されている場でもある。参加者は、詩人の言葉と感性の手触りに包まれながら、「絵本に憧れていた」氏への追悼の念を強めていた。

前大会実行委員会では、第27回絵本学会聖心女子大学大会へ谷川氏の御登壇を打診したが、叶わなかった経緯がある。会員同士の交流を主たる目的とする懇親会ではあるが、多くの一般の参加者もあり、谷川俊太郎氏を追悼するに相応しい場となった。

(文責：水島尚喜)

スペシャルトーク

荒井良二の魅力を解明する

—マーガレット・ワイズ・ブラウンや長新太から何を学んだか?—

第1日目 6月21日(土) 14:10~16:30 (講堂)

荒井良二さん(絵本作家)

聞き手: 松本猛(大会実行委員長/ちひろ美術館常任顧問、
元絵本学会会長、横浜美術大学客員教授)

趣旨

荒井良二さんは、マーガレット・ワイズ・ブラウンや長新太の絵本を見たことが絵本づくりに興味を持ったきっかけだったと語っている。

現代の絵本表現に大きな足跡を残し、絵本の可能性を広げたこれらの作家の仕事を確認し、絵本表現の発展の歴史と現在の到達点について、また荒井良二さんが、絵本でどのような世界を表現しようとしているのかを訊くことが、このスペシャルトークの趣旨であった。

荒井良二氏の略歴

荒井良二氏は、1956年、山形県・山形市生まれ。日本大学芸術学部美術学科を卒業。1990年『メロディー』で絵本作家としてデビューした。『うそつきのつき』で小学館児童出版文化賞、『きょうはそらにまるいつき』で日本絵本賞大賞などを受賞。さらにスウェーデンのアストリッド・リンドグレン記念文学賞を日本人で初めて受賞した。

鮮やかな色彩と詩的な世界観による作風で幅広い世代に支持されている。2023年~2024年に展覧会「new born 荒井良二 いつもしらないところへ たびするきぶんだった」が横須賀美術館他で開催された。

「絵本という場」をめぐる

「最初は“荒井良二解体!”というテーマでやりたいと思ったのだけれども、「解体」などと言うと、なんだかマグロの解体ショーみたいな感じになっちゃうので『荒井良二の魅力を解明する』というタイトルになったんですよ(笑)」という松本猛さんのジョークからトークは始まった。

松本さんは展覧会の図録に掲載されている次のような荒井さんの言葉を引用し、その意味について質問した。

「ぼくは「絵本」も作っているので、「絵本作家」と呼ばれることが多い。でも、ぼくにとって大事なものは、「絵本」であって、「作家」ではない。ぼくはものを考えたり作ったりするときは、いつもぼくの「絵本フィールド」に立っている。この場所から「言葉」が生まれてきたり、「絵のようなもの」が

出てきたり、「うた」のような(誰でも歌うことのできる)ものを口ずさんだりしている「ぼくの創造の源」なんだと思う。—

これに対して、荒井さんは、「美術館での展覧会という、作家の業績を年譜のように並べたものが多く、最後に『この人はいつお亡くなりになったんですか』などと言われてしまう(笑)。そういう展覧会にはしたくなかった。これまで自分が手がけてきた様々な面を表現したいと思ったんです。」と応じられた。また、「自分は絵本作家として活動しているが、絵本を作ることだけを表現と考えているのではないので。様々な芸術活動のひとつとして考えている」とも発言された。

さらに「絵本フィールド」とは何かについて、松本さんが質問したのに対しては、「そこに行けば言葉が出てくるような、絵本的な場所があるような気がする」と発言された。

これに対して松本さんが「それは絵本という物理的なモノを意識してのことなのか」と訊いたのに答えて、新井さんは「自分の中には「絵本的な領域」のようなものがあって、そこでは絵本をつくるように詩を書いたり、絵本にするようなイメージで、音楽をつくったりできる気がします」と発言された。

このようなやり取りの中で、以下のような荒井さんの言葉が印象に残った。

「絵本というものによって、言葉が引っ張り出されてくるようなこともありますね。自分では何か画期的な新しい表現方法を見つけた気になって、興奮するのだけれど、それは“絵本的なアプローチ”であったことに気がついて、がっかりすることもあるんです。—

マーガレット・ワイズ・ブラウンから「ヘタウマ」論議へ

荒井良二さんが、高校生の頃に初めて買った絵本は、レオ・レオーニの『あおくとときいろちゃん』であった。大学生になり、マーガレット・ワイズ・ブラウンの『おやすみなさい おつきさま』に興味をもったが、原書であったため当時は買えなかった。そこで洋書店に通い詰めて立ち読みするなどした。

松本さんからは、そのようなマーガレット・ワイズ・ブラウンへの傾倒ぶりが荒井さん初期の作品に見られるという指摘があった。

荒井さんが大学を卒業した頃は、日本経済が右肩上がり成長した時期だった。それに伴って商業美術や広告の表現などが注目され、西武やパルコの広告戦略などが影響力を持った。

荒井さんは、大学を卒業したが就職するのが嫌で焼鳥屋さんでアルバイトをしていた。しかし、その店に通っていたマスコミ関係者の縁から広告の仕事をするようになった。

この時代に、荒井さんは湯村輝彦氏の『さよならペンギン』や長新太氏の『ちへいせんのみえるところ』などの絵本と出会い、

衝撃を受けた。

これらの絵本は、ナンセンスや不条理という、従来の物語の不文律を逸脱したテーマをもっていた。また表現においても、熟達した技法を拒否したものであり、当時「ヘタウマ」と呼ばれた。

トークは「ヘタウマ」をめぐる論議になった

荒井さんは、「湯村輝彦さんはヘタウマの元祖と言われたけれど、実はすごく絵がうまい人なんです」と述べた。

他方、松本さんも、「長新太氏も本来は、ウマウマだった。しかし、ヘタウマというのは、技術的な絵画表現に対する抵抗であったことから、権威への反抗としてのヘタウマを選択したのではないか」と言い、更にこのような絵本は、読者対象として、子どものみを想定したものではなく、その結果、絵本の新しい読者層の拡大につながったことを指摘した。

『あさになったのでまどをあけますよ』と東日本大震災

荒井良二さんの代表作のひとつとなっている『あさになったのでまどをあけますよ』（2011年／偕成社）は、東北芸術工科大学の学生とのワークショップの最中に起こった東日本大震災の復興のボランティア活動の中から生まれた。

余震が頻発するなかで、荒井さんも学生たちも、なかなか言葉が落ちてこなかった。けれども、復興のシンボルとして旗をつくり、子どもたちに絵を描いてもらった。いろいろな被災者の人の話を聴く中で、「夜が怖い」「暗いところが不安だ」という声を多く耳にした。

そこで、夜ではなく、朝がくる絵本を描こうと思ったという。

地球のどこかには、必ず朝がある。それを追いかけていくような絵本にできないか。「あさになったのでまどをあけますよ」というタイトルも、荒井さんが学生たちに語りかけた言葉から生まれた。

「朝になって、窓を開いたり、カーテンを開けたりするような、日常的なことが新鮮であり、意味がある、そんな絵本にしたいと思いました。ぼくの絵本づくりの中で、いちばん時間がかかった本でもあるんです。」と荒井さんは語られた。

ささやかなメディアであることを大切に

絵本というのは、お母さんが子どもに読んであげるような一対一の関係が基本だと荒井さんは言う。

絵本はそのような、ささやかなメディアだ。けれども、それゆえ誰でも取り組むことができる。

絵本作家と言われる人だけではなく、多くの人たちに関わってもらい、絵本をつくったり、読んだりして楽しむことを知ってほしい。

この意味で、自分もプロっぽくならず、様々な表現活動のひとつとして絵本を描いていきたい、と荒井良二さんは最後に述べられた。

（文責：穴澤秀隆）



研究発表

研究発表 A 座長：馬見塚昭久、松本由美

1. 植田真澄（向台保育園）

家庭に絵本を届ける

ー小規模保育園でのおはなし会の実践を通してー

デジタル機器が家庭に浸透し、テレビやスマホ、タブレットでの動画の視聴が低年齢化している時代にあって、親子で絵本を楽しむ触れ合う機会の充実が重要と考えた。そこで、まず、絵本の楽しさを家庭に伝える手立てとして実践した「絵本だより」についての報告がされた。

「絵本だより」は、発表者が、横浜市の保育園で行う読み聞かせて読んだ絵本の紹介と、子ども達の反応をまとめたものである。これを、保護者にも共有することで、家庭でも絵本を楽しむ機会を持つ契機となると考えた。また、保護者と職員に行ったアンケートで明らかになった、おはなし会の効果や期待することが、本発表により、学会員にも共有された。発表後、「絵本だより」についての具体的な質問も寄せられ、活発な議論が行われた。

2. 相沢 和恵（山村学園短期大学）

村中 李衣（山口学芸大学）

「絵本や読み物」と乳幼児期にどう出あうか

ー子ども、保護者、学生のアンケートからみえてきたものー

本研究は、2024 年に、幼稚園卒園児とその保護者、大学生を対象に行った大規模アンケート調査における質問；「どこで誰と読んだ「絵本や読み物」が一番心に残るのか」に対する自由記述回答の分析から、「読書」経験が、自己形成において重要な役割を果たすことを明らかにしたものである。

「読書」体験は、具体的な言葉の記憶を持ちつつ、各自の心の中で熟成し、五感を伴う体験や非言語的要素（仕草や声）、また遊びへの発展の記憶などと融和して「読書」経験となり、乳幼児期の自己形成の過程で、重要な役割を果たす。

また、本研究を通じ、読書環境としての「園」と「家庭」の役割を二分せず柔軟に考えることで、それぞれの新たな可能性や役割を模索しつつ、多様な家庭環境にある子どもたちを射程にいった、読書活動の役割を果たせることも述べられた。

発表後、特にアンケートの具体的な内容に質問が多く寄せられ、活発な議論が行われた。

3. 小松 麻美（神戸芸術工科大学）

尹 惠貞（一橋大学）

原画展「絵本図書館の 10 年、韓国絵本の 10 年」を鑑賞して

ー順天市立絵本図書館開館 10 周年企画展にみる韓国絵本の現在ー

2024 年に開館から十周年を迎えた順天市立絵本図書館は、従来の図書館機能に加えて、原画展を通じて絵本をイラストレーション芸術として位置づけてきた韓国の絵本専門図書館のパイオニアである。また、絵本の芸術的価値の継承も視野に入れて、参加型イベントの開催や韓国絵本の作家の支援など、韓国絵本界のハブとしての役割も果たしてきた。

十周年企画展「絵本図書館の 10 年、韓国絵本の 10 年」（会期：2024 年 11 月 26 日～2025 年 3 月 23 日）では、図書館所蔵のリュウ・ジェスウをはじめ、ハン・ビョンホ、スージー・リーなど、韓国を代表する作家の貴重な原画が紹介され、韓国絵本の現在を一望できるものであった。

本発表では、これまでの調査を踏まえつつ、企画展を通じて、韓国絵本の 10 年について報告した。

4. 発表者都合により辞退された

（文責：松本由美）

研究発表 B 座長：かわこうせい、永井雅子

1. 遅文俊（京都精華大学大学院生）

1970 年代の絵本論争

ー田島征三と赤羽末吉の制作論からー

絵本評論専門誌『月刊絵本』における、絵本表現をめぐる議論の分析を通して、同誌の編集委員であった田島征三が、従来の「童画」や固定化された「絵本向きの絵」という概念を批判した点が指摘された。その例として赤羽末吉『かさじぞう』が挙げられ、同作の表現を当時の議論に即して検討することで、1970 年代の絵本表現の探求が現代に与えた影響についての見解が提示された。会場からは、「子ども向きの絵」について、実際に絵本を購入し選ぶのは保護者・保育者である点をどう考えるのか、との質問があり、現代における読者層の拡大をふまえて、子ども向けとはどのような絵か考えている、との見解が示された。

2. 曾子安（京都芸術大学大学院生）

安野光雅『旅の絵本』シリーズにみられる画面要素の複合的ギミック

『旅の絵本』シリーズ全10冊を対象に、画面構成要素の分析が行われ、シリーズを通して、初期の視覚的ギミックを多用した表現から、中期では各国の文化的モチーフを前景化させる構成へ、さらに晩年には風景全体を静かに描く構成へと、表現志向が変遷したことが指摘された。この画面づくりの変化は、単なる風景の再現ではなく、作者自身の記憶や時間の経過が織り込まれた結果であることが考察された。発表を受けて会場では、『旅の絵本』が多焦点で描かれていること、作家が年を重ねることによる身体的変化が絵の変遷にも反映されている、といった広がりのある議論が行われた。

3. 生駒幸子（龍谷大学短期大学部）

海外向け絵雑誌「SILVER BELLS」（1952.02-1955.05）における日本の子ども文化の発信

第二次大戦後、被爆地広島で出版された英語版絵雑誌『SILVER BELLS』を対象に、日本の子ども文化が海外へどのように発信されたか、その調査結果が報告された。谷暎子らの先行研究に着想を得て、戦後間もない被爆地から、年中行事や遊びといった固有の文化が海外にどのように紹介されたのか、に焦点をあて、この絵雑誌の出版を歴史的に検証する第一歩としての考察が行われた。質疑応答では、質の高いイラストについて誰が描いていたのかとの問いに対して、黒崎義介など東京で活躍した挿画家たちが絵を手がけていたとの回答がなされた。



4. 浅野法子（大阪成蹊短期大学）

華語児童雑誌『世界兒童』にみる子ども

シンガポールで刊行された華語児童雑誌『世界兒童』（1950年代前半）を対象に、子どもの描かれ方を中心とした分析を通して、表紙絵や収録作品から、国共内戦後の中国のイメージが香港経由でどのように受容されたかが検証された。同時代の中国や香港の児童雑誌との比較を通じ、「中国→香港→東南アジア」という文化ルートが考察され、当時の時局を背景とした同誌の独自性が浮き彫りにされた。発表後、中華世界は複数の国にまたがるが、当誌では多文化共生と中華圏統合のどちらに力点が置かれていたのかとの質問に、その点を見定めることがこの研究の目的である、との回答があった。研究の進展に期待したい。

（文責：かわこうせい）

作品発表

第2日目 6月22日(日) 13:00～14:20

座長：佐藤博一、宮崎詞美

①『いとをかし』

加賀美裕子（東京展「絵本の部屋」）

布に糸で描いた作品。日常生活の中で祖母が裁縫をしながら語る姿や若き母との手遊びの思い出が、作者の「作り続け、言葉を紡ぎ、描く」日々とリンクし、あたたかな創作の源が伝わる。2023年の第26回絵本学会大会で発表された作品をさらに深め、四方に展開するユニークで美しい造本に仕上げた。

作者が48年続けている東京展「絵本の部屋」の活動をまとめた冊子も展示され、絵本を創作する活動と作品が、永い将来に貴重なレガシーとなっていく可能性を示した。

②『桃たねと梨つる』

魏辰宸（京都芸術大学大学院生）

グリム童話『ヘンゼルとグレーテル』を中国風に脚色した作品。古代中国における飢饉の中で生きる兄妹の姿によりジェンダーバイアスに対する問題意識を物語の推進力として描いた。

また、テキストを篆刻による落款を用いてイラストレーションと融合させ、その役割を視覚的に理解させる試みを行なった。落款に大小の文字を凝縮させて描くことで感情の変化をも伝達する斬新な表現をもたらした。さらに日本語版、中国語版、文字なし版、原画の展示により文字とイラストレーションの関係性やレイアウトの可能性を示した。

③『いちごばたけの中に』

川本みつこ（イラストレーター）

いちごばたけを舞台に、様々な画材を用いてやわらかなイラストレーションで表現し、おだやかに読者の想像力を駆り立てる作品。

作者の都合により、口頭による発表は行われずイラストレーション展示のみとなった。

絵本学会における作品発表と作品展示は、毎回会場の空間に合わせて展示の工夫を行なっている。絵本学会には、作家、児童生徒と共に作る教育者、絵本を学ぶ学生、研究者など、様々な動機と視点と表現を持った制作者がいる。作品発表は、制作者が作ることを通じてどのようなことを考えているのか、また、今、なぜ、何を描きたいのかを知ることのできる貴重な機会といえるだろう。今後さらに活性化していくことを願う。

（文責：宮崎詞美）



作品発表 展示風景



魏辰宸「桃たねと梨つる」

ラウンドテーブル

第2日目 6月22日(日) 14:30～16:30

ラウンドテーブル①

「絵本でつながるケアとインクルージョン」

コーディネーター：原島恵（ちひろ美術館）

コメンテーター：水島尚喜（聖心女子大学）

ゲスト：村中李衣（児童文学作家、絵本作家）

はじめに

今回の絵本学会大会のテーマは「絵本の窓から世界を見る」である。本ラウンドテーブルでは、ひとつの芸術として成熟してきた絵本を、さまざまな人たちとの関わりの中から見つめ直し、絵本が本来備えている力や特質と、その新たな可能性をさぐる機会とした。そこで、現在、各分野で注目されている「ケアとインクルージョン」をテーマに据えて考えることにした。「ケア」は、心と体をケアすることや、生活の質の向上、そして社会参加への支援なども意味する。「インクルージョン」は、「社会包摂」とも称されるが、性別、年齢、国籍、障がいの有無など、あらゆる特性に関わらず、誰もが自分らしく生きる環境を整え、尊重しあうことを意味する。このテーマに則して、原島は、この20年をふりかえて絵本が求められてきた状況や社会的な役割を概観し、水島は、かがくいひろしの制作からケアとインクルージョンの背景にあるものを探り、村中は、自身が実践している絵本の読みあいやワークの事例を紹介し、ラウンドテーブルを展開した。

この20年をふりかえて

2001年に「子どもの読書活動の推進に関する法律」が施行されたことを受けて、各方面から絵本の読み聞かせや、ファーストブックを手渡す活動などが広がった。就学前の乳幼児だけではなく、小学校高学年や中学生なども対象に盛んに読み聞かせが行われ、幅広く絵本が読まれるようになった。

この20年ほどを振り返ったときに、日本の絵本において、東日本大震災の発生は、大変大きなできごととして記憶されている。絵本や子どもの本に関わる人たちによる直接的な支援のほか、震災や原発をテーマにした絵本もつくられた。被災した人たちの心のケアにも大きな関心が寄せられた。震災、そして、コロナ禍で絵本が求められたことは、売上からも見て取ることができる。長らく出版不況といわれるなかで、絵本は堅調に売上を伸ばしている。命や、人とのつながり、自然のありかたなどの普遍的なテーマの絵本が求められた。危機的な時代のなかで、読み手側がその意義を敏感に感じ取り、共感が得られたのではないかな。

絵本の売上が伸びている理由として、絵本のテーマの多様化とともに読者層が広がったことも挙げられる。2010年代以降は、国内で多様な人々が社会の一員として、差別や偏見なく、平等に機会を享受できる社会を築くための法整備が進み、文化芸術活動に関連する法案も成立した。こうした背景のなか、セクシュアル・マイノリティや、見えにくい困難を抱える人たちなど、多様性を受け入れるテーマの絵本が相次いで出版されるようになった。欧米でも、難民など社会から排除された人たちや、社会的な困難を抱える人やジェンダーなどをテーマにした絵本が数多く出版され、日本でも翻訳出版され、近年、その数は増えている。また、2022年のロシアによるウクライナ侵攻、そして翌年にはパレスチナとガザの戦争がはじまり、現在も終わりが見えない中で、戦争や平和をテーマにした絵本が国内外でこれまでに出版されている。震災やコロナ、そして戦争など社会をゆるがす大きなできごとが起こり、読み手の感受性も研ぎ澄まされ、読み手の奥底にある感情を喚起する絵本が求められているのではないかな。

ケアとインクルージョンの背景にあるもの—かがくいひろしの制作から

まずテーマであるケアが行われる関係性に注目したい。キュア（Cure）は治療を行うことで、上から下へという関係がつくられる傾向が強いが、ケア（Care）は対等な関係性を築くところから始まる。かがくいひろし（1955～2009）は、まさにケアの姿勢で教育や絵本づくりに取り組み、インクルージョンを体現した作家である。『だるまさんが』（ブロンズ新社）は2008年に刊行されて以来、ファーストブックとして絶大な人気を博している。そこからは、彼が向かい合い、受け止めた子どもの身体感覚が伝わってくる。

かがくいは、早逝した障がいのある姉と姉を支えた家族の存在を起点として、人が生きていくうえで大切なことについて常に思考し、実践をしていた。学生時代は彫刻制作に取り組んでおり、その経験は命の手触りをとらえることにつながっている。また、当時、社会的なメッセージ性を持つ絵本が台頭するなか、『はせがわくんきらいや』（長谷川集平作・絵、すばる書房、1976年）に感動していた。それは、彼が絵本を表現のひとつとして認識するきっかけにもなった。大学卒業後は、約30年にわたり特別支援教育に取り組む、重度の障がいのある子どもたちと独自の芸術／教育活動を続けてきた。四肢が不自由で発語が難しい子どもに向き合い、その呼吸に合わせて、ともに音を奏で、絵筆を動かした。かがくいは、子どもとフラットな関係性を結び、ことばではなく、呼吸や触覚を通して、子どもの命に向き合っていた。

教育の現場以外でも、人形劇の活動や造形作品の展示などを行っていたが、彼が絵本制作に取り組み始めたのは、40代に入ってからである。2005年に絵本作家としてデビューしてから、2009年に54歳で亡くなるまでのあいだに14冊、没後に

2冊、合計16冊の絵本が刊行されている。デビュー前に制作していた絵本『うめじいのたんじょうび』（講談社、2016年）は、つけものたちが梅干しのおじいさんの誕生日を祝う物語。うめじいが語るうめことばは、理解ができないけれど、みんなでうめじいを囲み、彼が生きてきた道を想い、祝う。まさに特性の違いを超えて共感しあうインクルーシブな世界が描かれている。かがくい絵本の根底に一貫してある「愛ある知性と感性」は、今の時代にまさに求められているものであり、子どもたちは直観的にそれを感じ取っているのであろう。

絵本に抱かれるような環境を

山口県山陽小野田市の小野田めぐみ幼稚園は、療育も含め様々な環境にある子どもたちが通園している。その中で、保護者や地域の方とともに、絵本を大切に活動を重ねてきた。たとえば、保護者が中心となり、表紙を見せて絵本を展示できる面展台を手づくりし、子どもたちが「ものがたり」の世界に身体ごと入りこめるような絵本の迷路が園内に設置されている。まずはこの園で村中が2年間継続して行ってきた子どもたちとの絵本の読みあいやワークから気づいたことを報告する。

年中のクラスで読みあった『エンとケラとブン』（いわむらかずお作・絵、あかね書房、1982年）は、心を表す丸い吹き出しのなかに、悲しみを表す「エン」、嬉しさを表す「ケラ」、怒りを表す「ブン」があり、そのどれかひとつが大きくなったときでも、そのほかのふたつの気持ちが完全に消えてなくなるわけではないことが描かれている。読み終わった後、男児Tくんが、「自分の心のなかのエンもケラもブンも大きすぎて、丸のなかにおさまりきらなくて、苦しい。だから自分は大きくならなくちゃだめなんだ」と訴えてきた。周りの大人は、日ごろから彼の行動を問題視していたが、その苦しさに気づいていただろうか。この絵本が彼の心を認めるようにそこにあったから、彼は自身の苦しさを語ることができたのだろう。

在園児のなかには、経済的困窮など家庭の問題を抱えている子どもたちもいる。夜のうちにこっそりアパートから家族全員で姿を消した女兒のもとへ、居場所を突き止め届ける園からの支援物資の中に、村中は1冊の絵本『ぼくはせかいいちしあわせなねこ』（つがねちか作、赤ちゃんとママ社、2024年）を忍ばせた。雑然とした居室のなかで、女兒とその姉は、歓声をあげて、絵本を手にとると、うっとり表紙を見つめた。絵本の表紙から光が放たれ、「おいで、いいよ、ここにいて」と誘うのを目の当たりにした。それは、理屈抜きで子どもたちが絵本を受け止めた瞬間であり、さながら宮沢賢治作品に出てくる「とうめいなたべもの」のようだった。

また、村中は、16年ほど前から、希望する女性受刑者にわが子を想って1冊の絵本を選び声に出して読んでもらい、録音して子どもに届ける活動を行っている。カナダのトロントでも同様のプログラムが実践されていることを知り、昨年見学する

チャンスを得た。読字に困難のある女性が、支援者の補助を受けながら『かいじゅうたちのいるところ』（モーリス・センダック作、じんぐうてるお訳、富山房、1975年）を読んだ。主人公がかいじゅうたちの王様になって行進する場面が3見開きあるが、ここには文字がない。それまでたどたどしく読み進めていた女性は、この場面になると、ひとつ大きく息を吸った後、ジャングルのなかに風が吹きわたるような深い声を出した。まさしく、生きているという「息」が、3場面に行きわたり世界を満たした。この女性が悲しみのなかで生きているということ、その声をわが子に伝えたいという想いが伝わってきた。彼女がこの「ものがたり」を生きることで生まれた声だった。とかく型にはまったことばで導こうとする支援とは何かということに思い至るできごとのひとつでもあった。

新しい「ワークブック」づくりについて

現在、村中は、小川すはる、こしだミカ、近藤薫美子、さげさかのりこ、佐藤真紀子 しらとあきこ、という6名の画家の力を借りて、ともに新しいワークブックづくりに取り組んでいる。ケアするものとケアされるものが同じ地平で物語の世界を生きて、わたしがわたしであることを認めあっていくワークを提案しようとしているのだ。そのワーク実践の一端を紹介する。

小野田めぐみ幼稚園で、『アリのさんぽ』（こしだミカ作・絵、架空社、2005年）を読みあった後、こしだの絵をもとにした亀のコウラを描くワークを行った。自分が亀になり、大きくなったとき、どんな姿になるかを描くワークである。さきほど紹介したTくんは、卵を守るオスの亀のコウラを丁寧に描いた後、自身のことを語り始めた。「みんなは明るいときには、暗いところへ隠れるけれど、それはダメ。明るいときは、明るいところに隠れなければダメなんだ」と言う。「だから、ぼくは大きい声で歌を歌って、踊りまくって、隠れているんだ」と。Tくんの日常の目立つふるまいは、心のなかの重く暗いものを必死で隠すためのものだ気づかされた。Tくんは、絵本から「ものがたり」の世界を本気で生きることを学び、ワークを通して心がほぐれたところで、自分を語ることばが出てきたのだろう。

そのほか、養護施設の子どもたちとワークを行うなかで、村中自身がケアされた体験も語られた。こうした実践の場を考察の窓として、決して括ることのできないひとりずつの痛みや傷つきに「ものがたり」がどうかかわっているのかを、具体的に紹介した。そして、そこから、「ものがたり」を介して人と人が結び合う瞬間は、支援者によって明快に予想出来るものでもないし、それを求める方法論の提示はむしろ危険であることが強調された。そのうえで、当事者と傍らにいるものが対等な地平にあって、それぞれの人生に立ちあうこれまでとは異なる試みが、これからの新しいケアの可能性をみせてくれていることも希望を持って語られた。

（文責：原島恵）



ラウンドテーブル①

ラウンドテーブル② 「科学絵本について」

ゲスト：館野鴻（絵本作家）

コメンテーター：澤田精一（元福音館かがくのとも編集者）

コーディネーター：竹内美紀（絵本学会理事・機関誌編集委員長／東洋大学）

冒頭にコーディネーターの竹内より、絵本学会機関誌BOOKEND 2025「特集・科学絵本を考える」とのコラボ企画であることをお話しした。

昨年の絵本学会理事改選にあわせて機関誌編集委員会も新体制として編集方針を検討する中で、今回の横浜研究大会がコロナ以来の久しぶりのリアル開催として期待されていることにあわせて、最新号を会場に並べたいと試みた。2024年版の10月発刊に比して、かなりの大車輪ながらも大会に間に合うように2025年6月刊行が実現できたことは、多くの絵本学会会員や関係者のご尽力であることに感謝している。

特集で科学絵本を取り上げたのは、AIに代表されるデジタル時代であって、科学的なものの考え方を育てる必要があると多くの人が認めるにもかかわらず、絵本関係者には文系が多く、物語や生活絵本に比べて、論じられることが少ないように思ったからである。今回の特集は、戦後日本の科学絵本を俯瞰し、その中でも代表的な作家や作品に焦点をあて、子ども達にとって科学絵本がなぜ必要なのかを考え、科学絵本作家たちの創作の背景を知ることにより、親近感を持って科学絵本を手にとってもらえることを意図した。

今号はインタビュー記事も複数企画し、現役の絵本作家や編集者や関係者に直に話を聞くことができた。科学絵本に対する熱い思いを中心とした生の声を、編集委員だけが聞くのはあまりにももったいない。多くの絵本学会会員にシェアしたい

と思って、研究大会のラウンドテーブルに「科学絵本」というテーマを掲げ、BOOKENDとのコラボ企画を考えた。具体的には、BOOKEND 2025のインタビュー記事に協力いただいた現役の科学絵本作家・館野鴻氏に登壇を依頼し、快諾いただいた。話の聞き手としては、戦後日本の科学絵本の歴史を牽引した福音館書店「かがくのとも」シリーズの編集経験もある元絵本学会会長の澤田氏をお願いをした。

登壇3名（館野、澤田、竹内）での事前打ち合わせを行ったが、ラウンドテーブル2時間という制約の中で、科学絵本全体の流れを俯瞰したり、科学絵本の定義に踏み込んでいくと、抽象的な議論になりかねない。それより、せっかく現役の絵本作家を迎えるのだから、リアル会場で本人からしか聞けないような実体験を含めた、リアルな科学絵本談義を中心にしようということになった。

大会パンフレットのラウンドテーブルの案内では、「かがくのとも」を中心に日本の科学絵本の歴史をたどると触れていたこともあり、冒頭に竹内が執筆した『BOOKEND2025』の特集巻頭記事を紹介し、かこさとしを中心とする戦後日本の科学絵本の俯瞰に代えさせていただいた。その後、澤田氏にバトンを渡し、館野氏の作品を時系列的に追いながら、科学絵本作りの現場を聞き出していった。

館野氏のデビュー作『しでむし』は、調査・観察・作画を含め10年かけた労作であり、澤田氏が館野氏に注目するきっかけとなった作品である。図鑑のイラストを描いていたのが、カメラの性能向上により手間暇かけて絵を描く必要がなくなり、細密画のニーズがなくなって、絵本創作を勧められ、図鑑経験者らしく正確な観察を土台にしたいと考えたのが原点だと言う。『ぎふちょう』『つちはんみょう』と偕成社の4冊本、福音館書店「かがくのとも」シリーズの作品などを取り上げながら、細密画の創作過程を解説していった。

館野氏は画家でありながら、後進育成にも熱心で、自身が手掛け弟子が絵を担当するという作品を送り出している。そのスタートは、館野文、かわしまはるこ絵『あまがえるのかくれんぼ』である。かわいい絵だけでは終わらず、死と直面する生命の物語にすることが、絵本が図鑑とは異なることの証明であり、擬人化の観点からカエルに洋服を着せるかどうかなど試行錯誤しながらの作品となっていた。

途中、澤田氏が手掛けた「かがくのとも」など数冊紹介し、宇野重喜良など一般的に科学絵本とは無関係と思われる作品についても、絵の見方が科学絵本を見るときと共通するなど、科学絵本とは何かを考える上で、多角的な視点を提示した。

館野氏の最新作『うさぎのしま』（世界文化社）と『すずめばち』（福音館書店）も紹介された。『すずめばち』はライブペイントという手法で短時間に完成絵とし勢いがある反面、細密画とはかなり違った印象がある。『うさぎのしま』は、戦時中に毒ガス実験に使用されたウサギをテーマに広島県大久野島に取材

している。当時の毒ガス実験の状況を絵にするには、科学絵本の手法が使える。現存する部分的な資料を基に、全体像を想像して絵にしていという作業は昆虫の生態でも同じだという。

リアルな絵本作家の話は個別エピソードの連続で、ともすると館野氏の個人史ととらわれがちだが、写真と絵は何が違うのか、科学絵本にとって大切なことは何かを考える上で大いなる示唆となった。また、ラウンドテーブルはその場でディスカッションが盛り上がるテーマもあると思うが、今回は、BOOKEND 科学絵本特集を作成するために1年前から議論し、事前に昆虫採集同行などもした。ラウンドテーブルの2時間で終わらず、BOOKEND を片手に、ここでの議論の種を、会員それぞれが自分の現場に持ち帰って、学校や図書館や文庫で子どもたちに科学絵本を手渡し、絵本講座やワークショップなど絵本関係者が勉強を続けていくきっかけになってくれたら、企画者冥利である。

(文責：竹内美紀)



事前に虫調査に同行したときの写真(2025年6月2日)



ラウンドテーブル②科学絵本の様子

ラウンドテーブル③

「ブルーノ・ムナーリの絵本の独創性について」

ゲスト：岩崎清（日本ブルーノ・ムナーリ研究会代表）

コーディネーター：有福一昭（有明教育芸術短期大学）

ブルーノ・ムナーリは、1907年にイタリアミラノで生まれ、1998年ミラノで没するまでグラフィックデザイン、絵画、プロダクトデザイン、彫刻、オブジェ、そして絵本作家として活躍した20世紀のアーティストである。ムナーリは、造形美術における五感の開放、素材における積極性、光や運動や時間などの概念を持ち込んだ未来派に大きな影響を受け、さらにムナーリの幼少期に培われた自然観察から獲得した美的感性や造形性が融合し一連の作品を発表していった。そうした多面的な活動をしたムナーリの絵本の独創性について、岩崎氏の話はムナーリの出会いから始まった。

岩崎氏は1960年世界デザイン会議でムナーリの作品「ダイレクト・プロジェクション」と初めて出会い、1965年「現代イタリアデザイン展」、伊勢丹「ブルーノ・ムナーリ展」でさらにムナーリを身近に感じ面白さを知ったという。そして当時、イタリアから帰国したばかりの建築家・上松正直氏からムナーリ著の「円と正方形」という本を紹介され美術関係の出版社に勤務していた氏は編集者として関わり、日本で初めてのムナーリの翻訳本として出版した。この本はグラフィックの本と見られているが、絵本のような面白さを感じるものであったと言う。「円と正方形」では形が持つ造形的要素、力などをさまざまな写真や図像を使って読む者に押しつけがましくなく提示している。

そして1985年こどもの城で氏が企画した「ムナーリ展」での展示、シンポジウム、ワークショップでのエピソードの紹介があった。

そうしたムナーリの出会いの流れを氏は遠くから見たムナーリ、近くから見たムナーリ、そして直接会ったムナーリと表現されたが、これはまさに日本におけるムナーリの受容の流れとリンクしているといえるのではないだろうか。

そして、ムナーリの作品を紹介しながら作品と絵本のつながりについて話された。はじめに平面作品「陰と陽」「知らない国の読めない言葉」「ゼログラフィア」、彫刻作品「折りたたみのできる彫刻」「役に立たない機械」、プロダクト作品「フォークランド」「クーボ」などの作品が持っている造形思考、エッセンスを紹介。こうした造形思考のエッセンスがムナーリの絵本の中に注ぎ込まれていることについて絵本を紹介しながら解説した。例えば、「ムナーリの機械」では機械は人間の生活に役立つために生産されたものであるが、動きはするが何も生み出さない機械を集めた絵本。また1945年にシリーズで9冊刊行された「たんじょうびのおくりもの」(原題訳は「トラックの男」)を紹介し、主人公の気持ちの変化を紙の大きさや色の変化な

どを巧みに使った絵本。そのほか「木をかこう」「太陽をかこう」「暗い夜に」「きりのなかのサーカス」「みどりずきん」「きいろずきん」「しろずきん」「みんなともだち」などの絵本や遊具を紹介しながらムナーリの絵本のお話のシンプルさと色、形、素材などの使い方の巧みさについて紹介した。そして、「美術と視覚」(ルドルフ・アルンハイム著)やゲシュタルト心理学、ピアジェの話をつなぎ交ぜながら、紙の大きさと色だけで構成された文字のない絵本「読めない本」「本に出会う前の本」のように読む人の感性で自由に感じることで解釈できる絵本の独創性について言及した。

岩崎氏は、美術の世界でのムナーリについてメキシコの詩人・評論家のオクタビオ・パスの言葉を借り、20世紀はそれ以前の美術の世界にはないような激しい運動で始まった。20世紀美術に貢献したアーティストであるマルセル・デュシャンとピカソとムナーリを比較した。パスによると20世紀はマルセル・デュシャンとパブロ・ピカソの間で揺れ動いた時代で、ピカソは限りなく自己破壊し常に新しい表現を求めたアーティストであり、マルセル・デュシャンはそれまでの美術の概念を壊しデュシャン以降のアーティストに大きな影響を与えたアーティストである。デュシャンもピカソもアートの世界では突出していることは間違いない。しかし、ムナーリは美術という枠内だけで美術を探究したのではなく、美術の持つ視覚性による伝達力に注目して、その可能性を追求したところに独自性がある。ムナーリは、文字が物事を伝えるのと同じように、美術の表現もコミュニケーションができると信じ、発信し続けたアーティストであり、教育者であった。

ムナーリがその多様な作品や絵本を通して私たちに問いかけようとしたことはなんだったのであろうか。ムナーリは、人類はコミュニケーション手段である言葉を発見する前に、アルタミラ洞窟壁画のような絵による伝達手段を持っていたように、アートという世界が生まれるずっと前にアートには物事を伝えるという機能があると言っている。ムナーリは美術の世界は楽しいもので、難しいものではないことを教えてくれている。美術に近づくために最初に出会うための窓が絵本ではないだろうか。

(文責：有福一昭)



ラウンドテーブル③

企画展示 教育現場の絵本表現

大学における教育現場では、各専門課程のカリキュラム目的に沿って、絵本表現に対するさまざまな取り組みがみられます。今回の企画展示では、会員が制作・研究指導を担当する五つの大学から在校生、卒業生が制作したオリジナル絵本作品が選抜され、教育方針や課題内容の解説とともに公開されました。

【各大学の展示紹介】

・筑波大学

筑波大学芸術専門学群は、国立の総合大学の中に設置された芸術の専門教育機関です。1学年100名の少人数に14領域の多彩な芸術の専門教育を提供できる利点を生かして、幅広い見識と豊かな創造力をそなえた芸術の専門家を育成しています。

ビジュアルデザイン領域では、絵本やマンガ、イラストレーションに関する授業を開講しています。本学には絵本のみを対象とした授業はなく、絵本を含む広義の「ナラティブイラストレーション(物語を表現するための絵)」の制作方法について演習と講義を開講しています。博士前期課程では、より専門的に絵本の制作・研究を学ぶことができ、博士後期課程では、実践に基づく絵本研究やデザインの視点からの絵本研究を志す学生を受け入れています。ここでは、主に学群生向けの授業内容を紹介します。(文責：山本美希)

・東京成徳大学

東京成徳大学子ども学部子ども学科では、実践的な保育・教育力の養成はもちろん、多様な学問領域からのアプローチを通して視野を広げ、子どもに関するさまざまな課題に取り組めるプロフェッショナルの育成を目指しています。知識と実践の両輪による学びを重視しています。

その一環として、2年次には「絵本作成演習」の授業を開講しています。この授業では、毎年30名前後の学生が履修し、絵本の歴史やテーマの多様性、読者対象の特性などについて深く学んだ上で、最終的にオリジナル絵本を一冊制作します。文や絵はすべて学生自身の手によるもので、出版社名や販売価格も考えて、思いを込めた一冊に仕上がっていきます。

保育者を目指す学生が多いことから、「子どもたちに伝えたいこと」や「食育」「友だちとの関わり方」といった保育の視点を活かしたテーマが多く選ばれています。また、将来保育現場で子どもたちと一緒に楽しむことを想定して制作に取り組む学生も多く見られます。

本展示では、2023年度および2024年度にこの授業を履修した学生の作品の一部をご紹介します。(文責：高野直子)

・横浜美術大学

横浜美術大学イラストレーションコースでは、前身のトキワ松学園横浜美術短期大学時代よりビジュアルデザインの1分野として絵本作成教育に取り組んで来ました。絵本を深く総合芸術として捉え、企画・イラストレーション制作・エディトリアルデザイン・印刷・製本まで学生自身が行った絵本と数100冊に及ぶ完全原稿データを20年以上蓄積し、読みきかせ活動や福祉施設への貸し出し、展覧会を行なっています。

本学では「絵本作家」を養成することのみを目標とはしていません。絵本制作を通じて教員と学生との対話を大切にし、コミュニケーションの中で「人として生きる力」を育むことを目指しています。

2019年には日本国内で珍しい「絵本専攻」を開設しました。様々な分野の研究者やクリエイターが指導に加わり、さらに多様な視点から絵本表現を探究しています。今回の展示では、2年生から4年生までの学生の成長のプロセスをご高覧ください。(文責：宮崎詞美)

・静岡文化芸術大学

デザインを学ぶ大学3年生が、選択科目「領域専門演習」のなかで制作した、しかけ絵本です。イラストレーション7点以上(表紙絵+扉絵+見開き絵5点)を描き、触る、動かす、音を出すなど、さまざまなしかけと合わせてデザインし、絵本にします。絵と文としかけが1つのテーマによって融合するかたちを模索し、平面のグラフィックデザインに慣れ親しんできた学生が、立体工作に挑戦します。しかけ絵本は、コストや手間などさまざまな要因で、しかけのない絵本ほど多くは流通しません。一方で、1点ものをつくる大学生なら、大部数発行の制約を受けずに、もう少し幅広い表現技法を採用できます。本の電子化がすすむ中、紙の絵本ならではの楽しみを広げる工夫を凝らした成果物が誕生しています。(文責：かわこうせい)

・京都芸術大学(学校法人 瓜生山学園)

芸術学部(通学部)のうち、情報デザイン学科、こども芸術学科、キャラクターデザイン学科などで、毎年度の卒業制作展に絵本が展示されています。学士課程では、芸術の多様な専門分野の教育目標に応じて絵本の表現・制作を活用し、社会と芸術の関わりを重視した独自の教育プログラムが展開されており、同様のカリキュラムは通信教育部でも部分的に取り入れられています。

今回の展示作品が制作された大学院修士課程(芸術環境専攻)における絵本の研究・制作分野では、学部教育との一貫性を特に重視せず、また、芸術大学出身者に限定することなく多くの学生、留学生を受け入れ、絵本に関連する学生個々の研究課題を発展させるための指導が行われています。出版・編集、デザイン、美術などの領域を横断的に捉え、文学、教育学、社会学、心理学といった学術分野にも触れながら、芸術表現

メディアの一形態としての絵本に対する実践的研究に取り組んでいます。(文責：佐藤博一)



2025年度 第28回 絵本学会定期総会議事録

日時：2025年6月21日（土）17:10～18:00

場所：横浜市開港記念会館（横浜市中区）

議長：佐々木由美子 書記：高原佳江

出欠について:GoogleFormsへの事前回答 172名(出席 42名、議長への委任 130名)

当日出席者数：57名

開会に先立ち、今年2月24日にご逝去された吉田新一名誉会員（初代会長）に哀悼の意を表し、黙祷が捧げられた。

1. 開会の辞

佐藤博一事務局長より、開会の辞が述べられた。

2. 議長・書記の選出

議長に佐々木由美子会員、書記に高原佳江会員が選出された。

3. 会長挨拶・大会実行委員の紹介

水島尚喜会長より、第28回定期総会開催にあたり、挨拶が述べられた。

第28回大会実行委員会事務局長の穴澤秀隆理事より、大会実行委員が紹介された。

4. 会則変更

佐藤博一事務局長より、資料に基づき「第3条（活動）」に「4. 日本絵本研究賞および各賞の授与」を明確に位置付け、付則に「本会則は令和7年6月21日から施行される。」と追記する旨説明され、承認された。

5. 2024年度活動報告

佐藤博一事務局長より、資料に基づき2024年度の活動報告が行われ、承認された。

6. 2024年度決算・会計監査報告

佐藤博一事務局長より、資料に基づき2024年度の決算報告が行われた。また、石井光恵監事より、杉浦篤子監事および石井監事による会計監査の結果、決算報告を適正と認める旨が報告された。審議の結果、2024年度決算報告が承認された。

7. 2025年度活動計画

佐藤博一事務局長より、資料に基づき2025年度の活動計画案が伝えられ、承認された。

8. 2025年度予算案

佐藤博一事務局長より、資料に基づき2025年度の予算案が伝えられた。各予算科目の増減に関する理由について説明がなされたうえで、予算案の採決が行われ、可決承認された。

9. 質疑応答

特になし

その他

・佐藤博一事務局長より、第29回大会の日時と場所について紹介がなされた。

日時：2026年6月27日（土）・28日（日）

場所：上川町かみんぐホール（北海道上川郡）

・閉会前に、第28回大会実行委員長の松本猛会員より、挨拶が述べられた。

10. 閉会の辞

佐々木由美子議長より、閉会の辞が述べられた。



2024年度活動報告

◎理事会

理事会の開催（5回：5月、6月、8月、10月、2月）
メール審議（9回：4月、5月、6月、7月、8月、9月、11月、12月、1月）

◎第27回絵本学会大会の開催

日程 2024年6月8日（土）・9日（日） オンライン開催
場所 聖心女子大学（配信会場）
テーマ 希望としての絵本～明日を生きるために～
参加者数 会員145名 一般58名 学生9名

◎企画委員会

・絵本フォーラム2024「ビジュアルで物語る多様性—英語圏の出版市場での絵本づくり—」
開催日 2025年2月23日（木）
場所 筑波大学東京キャンパス（東京都文京区）
講師 かわ こうせい（絵本イラストレーター）

◎紀要編集委員会

・絵本学会研究紀要『絵本学』第27号（2025）の編集・刊行
・2024年絵本研究参考文献目録（2024年1月～12月発行分）の作成
・2024年絵本原画展・絵本画家展リスト（2024年1月～12月開催分）の作成

◎機関誌編集委員会

・機関誌『絵本 BOOKEND 2024』の編集・刊行、『絵本 BOOKEND 2025』編集
・バックナンバーの販売促進

◎研究委員会

・2024年度絵本研究会の開催
開催日 2024年11月16日（土）
場所 一橋大学 東キャンパス（東京都国立市）
会員の口頭発表会として実施（発表7件）
・2024年度研究助成（1件／5万円）
申請者：冷 韜（筑波大学大学院生）
研究テーマ「日本の童画に見られる花の擬人化表現—視覚的デザインの観点から—」

◎広報委員会

・『絵本学会 NEWS』の編集（79、80、81号）
・『絵本学会 NEWS』の発行管理（78号：4月送付、79号：8月送付、80号：12月送付）

・学会ウェブサイト管理、運営、更新指示

◎日本絵本研究賞運営委員会

・2024年6月に開催された絵本学会大会において、第5回日本絵本研究賞の授賞式が行われた。本賞1点と奨励賞1点に対し、賞金と賞状が授与された。
・第6回に向けた2024年の年次賞として、研究賞・特別賞および各次点の計4点を選出した。

◎他学会等との連携

・三学会（日本児童文学学会・英語圏児童文学学会・絵本学会）共同声明の発信
・研究会等の情報共有

◎2024年度入退会（2025年3月末現在）

新入会者：53名
退会者：20名
除籍者：なし

2025年度活動計画

◎理事会

理事会の開催（5回：6月、8月、10月、12月、2月）

メール審議（6回：5月、7月、9月、11月、1月、3月）

◎第28回絵本学会大会の開催

日程 2025年6月21日（土）・22日（日）

場所 横浜市開港記念会館

テーマ 絵本の窓から世界を見る

◎企画委員会

・絵本フォーラム等の開催

◎紀要編集委員会

・絵本学会研究紀要『絵本学』第28号（2026）の編集・刊行

・2025年絵本研究参考文献目録（2025年1月～12月発行分）の作成

・2025年絵本原画展・絵本画家展リスト（2025年1月～12月開催分）の作成

◎機関誌編集委員会

・機関誌『絵本 BOOKEND 2025』の編集・刊行、『絵本 BOOKEND 2026』編集

・バックナンバーの販売促進

◎研究委員会

・絵本研究会の開催

・2025年度研究助成事業

◎広報委員会

・『絵本学会 NEWS』の編集（82、83、84号）

・『絵本学会 NEWS』の発行管理（81号：4月送付、82号：8月送付、83号：12月送付）

・学会ウェブサイト管理、運営、更新指示

◎日本絵本研究賞運営委員会

・2025年の推薦募集を11月に行い、2026年1月に年次賞を選出する。

・第6回より各賞の賞金額が増額予定（研究賞＝10万円、奨励賞＝5万円、特別賞＝10万円）。

◎他学会等との連携

・三学会（日本児童文学学会・英語圏児童文学会・絵本学会）連携企画シンポジウムの開催（2025年11月開催予定）

・研究会等の情報共有



絵本学会 2024年度 決算報告書

2024年4月1日～2025年3月31日

単位：円

科目	予算額 (A)	決算額 (B)	差引増減 (A - B)	備考
Ⅰ. 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
①受取会費収入	4,412,000	4,520,000	△ 108,000	
賛助会員	120,000	120,000	0	6団体×20000
正会員	4,240,000	4,328,000	△ 88,000	8,000円×(477名+新入会53名=530名(2025年3月31日集計)) 8,000円×11件(2023年度以前滞納分)
準会員	52,000	72,000	△ 20,000	2,000円×準a(4名+新入会2名=6名) 4,000円×準b(7名+新入会8名=15名)
②事業収入	270,000	302,636	△ 32,636	
研究活動事業収入	20,000	32,000	△ 12,000	
フォーラム収入	20,000	32,000	△ 12,000	参加費1000円×32名
研究会収入	0	0	0	研究発表会につき参加費無料
出版事業収入	250,000	270,636	△ 20,636	『絵本BOOKEND』2024年度販売手数料 (朝北社14,820円、文伸255,816円)
③雑収入	140,020	147,681	△ 7,661	
受取利息収入	20	826	△ 806	
入会金収入	90,000	126,000	△ 36,000	入会金2000円×63名
雑収入	50,000	20,855	29,145	出版物在庫(事務局保管分)頒布
事業活動収入合計	4,822,020	4,970,317	△ 148,297	
2. 事業活動支出				
①事業費支出	2,130,000	2,419,864	△ 289,864	
人件費支出	720,000	866,250	△ 146,250	
事務局報酬支出	0	0	0	
事務局委託費	720,000	866,250	△ 146,250	業務委託(株式会社 毎日学術フォーラム) 2023年度第4期、2024年度第1期～第4期
事業費支出	1,410,000	1,553,614	△ 143,614	
消耗品費支出	30,000	0	30,000	事務消耗品費
印刷製本費支出	610,000	612,255	△ 2,255	
絵本学会ニュース	150,000	129,540	20,460	絵本学会NEWS 78、79、80号
研究紀要	400,000	420,508	△ 20,508	2024年4月発行『絵本学』26号(2024)印刷製本費/増刷費
会員名簿	0	0	0	
その他	60,000	62,207	△ 2,207	学会封筒印刷代
通信運搬費支出	520,000	667,989	△ 147,989	絵本学会NEWS、『絵本学』等発送費、通信費
旅費交通費支出	0	0	0	理事会はオンライン開催
会議費支出	0	0	0	
広告費支出	160,000	218,390	△ 58,390	
印刷物制作費支出	0	0	0	
HP更新作業費支出	160,000	218,390	△ 58,390	2023年度後期、2024年度前後期
振込手数料	10,000	2,750	7,250	
雑支出	80,000	52,230	27,770	事務局移転費ほか
②活動費支出	1,470,000	984,367	485,633	
大会運営補助金支出	400,000	376,446	23,554	オンライン開催(聖心女子大学)
第27回 絵本学会大会補助金	400,000	376,446	23,554	大会参加費収入236,500円、支出612,956円
専門委員会活動費支出	920,000	557,921	362,079	
企画委員会	170,000	160,934	9,066	決算額41,066円から参加費収入(32,000円)を除く
紀要編集委員会	100,000	60,490	39,510	紀要『絵本学27号(2025)』編集等
機関誌編集委員会	100,000	100,000	0	『絵本BOOKEND2025』編集
研究委員会	100,000	83,004	16,996	研究会主催
広報委員会	100,000	10,208	89,792	『絵本学会NEWS』編集
日本絵本研究賞運営委員会	350,000	143,285	206,715	
研究助成費支出	150,000	50,000	100,000	2024年度助成1件
③出版事業支出	1,220,000	1,206,150	13,850	
編集作業費支出	0	0	0	
制作費支出	1,220,000	1,206,150	13,850	『絵本BOOKEND2024』制作費
事業活動支出合計	4,820,000	4,610,381	209,619	
事業活動収支差額	2,020	359,936	△ 357,916	

科目	予算額 (A)	決算額 (B)	差引増減 (A - B)	備考
II. 投資活動収支の部				
1.投資活動収入				
投資活動収入計				
2.投資活動支出	0	0	0	
投資活動支出計	0	0	0	
投資活動収支差額	0	0	0	
III. 財務活動の部				
1.財務活動収入				
長期借入金収入	0	0	0	
財務活動収入計	0	0	0	
2.財務活動支出				
長期借入金返済支出	0	0	0	
財務活動支出計	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
IV. 予備費支出	0	0	0	

当期収支差額	2,020	359,936	△ 357,916
前期繰越収支差額	7,107,577	7,107,577	0
次期繰越収支差額	7,109,597	7,467,513	△ 357,916

2024年度 財産目録

単位：円					
2024/3/31	項目		一般会計	20周年積立金	合計
	手元有高		0		
	りそな銀行		0		
	ゆうちょ銀行		2,361,121		2,361,121
	定期貯金			1,500,000	1,500,000
	振替口座		4,694,823		4,694,823
	未収金		51,633		
	仮払金				
	未払金				
	計	①	7,107,577	1,500,000	8,607,577
2025/3/31	項目		一般会計	30周年積立金*	合計
	1年後の増減	②	359,936	0	
	結果 ①+②	③	7,467,513	1,500,000	8,967,513
	結果③の内訳				
	手元有高（実際有高）		10		
	りそな銀行*		0		
	ゆうちょ銀行*		1,757,528		1,757,528
	定期貯金			1,500,000	1,500,000
	振替口座		5,340,823		5,340,823
	未収金*		369,152		
	仮払金				
	未払金				
	計	④	7,467,513	1,500,000	8,967,513
			収支計算書の 前期繰越差額		財産目録の 次年度繰越金

- * 1 項目「20周年積立金」は20周年（2017年度）がすでに終了しているため「30周年積立金」に名称変更
- * 2 りそな銀行の口座は2014年度決算で凍結、以降の使用実績もないため、2024年度末をもって項目削除
- * 3 ゆうちょ銀行の口座額は2024年度予算決算時点の2024年5月末記帳残額から2025年度予算収支分を除いた金額
- * 4 未収金内訳：出版事業収入（絵本『BOOKEND』ぶんしん出版 2024年度販売手数料）255,816円
2024年度専門委員会活動費残額返金（広報委員会）89,792円
第27回大会運営補助金収支残額（大会実行委員会）23,544円 合計369,152 円

	収入	支出
前年繰越	8,607,577	
会費収入	4,520,000	
事業収入	302,636	
雑収入	147,681	
事業費支出		2,419,864
活動費支出		984,367
出版事業支出		1,206,150
次年度繰越		8,967,513
	13,577,894	13,577,894

絵本学会 2025年度 予算

2025 年 4 月 1 日～ 2026 年 3 月 31 日

単位：円

科目	予算額 (A)	前年度予算額 (B)	増減 (A-B)	備考
Ⅰ. 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
①受取会費収入	4,490,000	4,412,000	78,000	
賛助会員	120,000	120,000	0	20,000円×6団体
正会員	4,320,000	4,240,000	80,000	8,000円×540名〔2025年4月1日現在572名+新入会〕
準会員	50,000	52,000	△ 2,000	2,000円×準会員a 5名〔2025年4月1日現在2名+新入会〕 4,000円×準会員b 10名〔2025年4月1日現在6名+新入会〕
②事業収入	250,000	270,000	△ 20,000	
研究活動事業収入	30,000	20,000	10,000	
フォーラム収入	30,000	20,000	10,000	参加費1000円×30名
研究会収入	0	0	0	研究発表会につき参加費無料
出版事業収入	220,000	250,000	△ 30,000	『絵本BOOKEND』バックナンバー2025年度分販売手数料 (朝北社+ぶんしん出版)
③雑収入	110,800	140,020	△ 29,220	
受取利息収入	800	20	780	
入会金収入	90,000	90,000	0	入会金2000円×45名
雑収入	20,000	50,000	△ 30,000	出版物在庫（事務局保管分）頒布
事業活動収入合計	4,850,800	4,822,020	28,780	
2. 事業活動支出				
①事業費支出	2,260,000	2,130,000	130,000	
人件費支出	720,000	720,000	0	
事務局報酬支出	20,000	0	20,000	本部事務局アルバイト報酬（@1,000円×年間20時間）
事務局委託費	700,000	720,000	△ 20,000	業務委託（株式会社 毎日学術フォーラム） 2025年度 第1期～第4期
事業費支出	1,540,000	1,410,000	130,000	
消耗品費支出	30,000	30,000	0	事務消耗品費
印刷製本費支出	440,000	610,000	△ 170,000	
絵本学会ニュース	150,000	150,000	0	絵本学会NEWS 78、79、80号
研究紀要	200,000	400,000	△ 200,000	2025年4月発行『絵本学』27号（2025）印刷製本費
会員名簿	0	0	0	
その他	90,000	60,000	30,000	学会封筒印刷代
通信運搬費支出	700,000	520,000	180,000	絵本学会NEWS、『絵本学』等発送費、通信費
旅費交通費支出	120,000	0	120,000	対外活動・学会事務運営時の交通費 ※ 理事会はオンライン開催につき予算計上なし
会議費支出	0	0	0	※ 理事会はオンライン開催につき予算計上なし
広告費支出	180,000	160,000	20,000	
印刷物制作費支出	0	0	0	
HP更新作業費支出	180,000	160,000	20,000	2025年度前後期
振込手数料	10,000	10,000	0	
雑支出	60,000	80,000	△ 20,000	予備費
②活動費支出	1,310,000	1,470,000	△ 160,000	
大会運営補助金支出	550,000	400,000	150,000	
第28回 絵本学会大会補助金	550,000	400,000	150,000	横浜市立開港記念会館（6月21・22日）
専門委員会活動費支出	610,000	920,000	△ 310,000	
企画委員会	180,000	170,000	10,000	「絵本フォーラム2025」開催補助金
紀要編集委員会	100,000	100,000	0	紀要『絵本学』28号（2026）編集等
機関誌編集委員会	100,000	100,000	0	『絵本BOOKEND 2026』編集
研究委員会	100,000	100,000	0	「2025年度 絵本研究会」開催補助金
広報委員会	80,000	100,000	△ 20,000	『絵本学会NEWS』編集／学会ウェブサイト最適化
日本絵本研究費運営委員会	50,000	350,000	△ 300,000	
研究助成費支出	150,000	150,000	0	2025年度助成
③出版事業支出	1,280,000	1,220,000	60,000	
編集作業費支出	0	0	0	
制作費支出	1,280,000	1,220,000	60,000	『絵本BOOKEND2025』制作費
事業活動支出合計	4,850,000	4,820,000	30,000	
事業活動収支差額	800	2,020	△ 1,220	

企画委員会

絵本フォーラム 2024 開催報告

絵本フォーラム 2024

「ビジュアルで物語る多様性

—英語圏の出版市場での絵本づくり—

講師：かわこうせい 先生 絵本イラストレーター

日時：2025 年 2 月 23 日（日）14：00～16：00

開催方法：対面開催 ※オンライン配信なし

会場：筑波大学東京キャンパス、119 講義室

申込者数：55 名

参加者数：32 名



2024 年度より企画委員会は、永井雅子を委員長とし、神谷友が再任、赤羽尚美が新規に加わり、3 名による新体制で運営しています。

2024 年度のフォーラムは、テーマを「ビジュアルで物語る多様性—英語圏の出版市場での絵本づくり—」とし、講師に絵本学会理事のかわこうせい先生をお迎えしました。イギリスに移り絵本を描いてこられたかわ先生に、英語圏の絵本づくりの現場で出版に至るまでの過程を、具体的なエピソードをまじえお話いただきました。先生が、絵本制作のなかで多様な人や生き物たちの違いを描き、イラストレーションについて現代的な意味を考えるに至り、教育にたずさわるようになった経緯にも触れられ、たいへん充実した時間でした。

序盤は、先生が渡英しエージェントと出会ったところからはじまり、英語圏と欧州の、日本とは異なる出版市場についてのお話を中心でした。中盤は「物語とは」「イラストとは」「絵画とは」という大きな問いかけがあり、古代ギリシアから物語や絵画の源流をたどり、現代の絵本までを俯瞰。学生の成果物の紹介を通して「現代絵本」の考察へと続き、先生の絵本論

が豊かに語られました。

後半は、帰国後、海外の出版社で制作された作品をスライドで見せていただきながら、具体的な制作プロセスをうかがいました。それぞれの出版社にポリシーや読者への配慮があり、編集者からの要望と日本人としての先生の考えのぶつかり合いも多いとのこと。キャラクター設定について編集者から予想外のリクエストがあった話など、驚きのエピソードや考えさせられるエピソードなどが多々ありました。

たくさんのスライドをご用意くださり、イラストレーションに関するクイズ(?)もあり、お話のなかにはユーモアがちりばめられ、あっという間の2時間でした。

会場内で、かわ先生の作品の展示もおこないました。絵本だけでなく、DVDやカレンダーなどのグッズ類、先生の挿絵による一般書などもご用意くださり、充実した展示となりました。多くのみなさんが興味深く手に取られ、先生の本はどこで買えるのか、日本語の翻訳が出ているのはどの絵本か、など尋ねられる場面もあり、なかには「今、スマホで購入を申し込みました」という方までいらっしゃいました。

質疑応答では、多くのご質問や感想を頂戴しました。感想を一部ご紹介します。

- ◆ 直接会わずネットだけで出ていく絵本作りのノウハウをはじめて知りました。
- ◆ 国によるイラストの好みとか、多様性への配慮など、文化バトルの話が楽しかったです。
- ◆ *Feeding the Flying Fanellis: And Other Poems from a Circus Chef* や *Issun Boshi* が作られていく過程がとても興味深かった。
- ◆ 世界や多様性など大きく広く幅広く捉えられる内容だったので、視野が広がってとても良かった。

当日、講演開始1時間前くらいのタイミングで、JR 京浜東北線が事故で運休になったために、会場までお越しになれなかった方が多くいらしたのが残念でした。メールにてその旨ご連絡くださったみなさま、ご配慮に感謝いたします。

（文責：神谷友）

紀要編集委員会からのお知らせ

『絵本学』第 28 号投稿募集

『絵本学』第 28 号（2026 年 3 月刊行予定）の投稿を募集します。

投稿に当たっては、下記の投稿規程ならびに絵本学会ホームページに掲載の執筆要項を十分お読みください。近年、原稿の種別を明記していないなど、不備が散見されます。宜しくお願いいたします。

投稿締切日：2025 年 9 月 30 日（必着）

原稿送付先・問い合わせ先：ehongaku.kiyo@gmail.com

絵本学会紀要編集委員会

研究紀要『絵本学』投稿規程

1. 投稿資格

絵本学会会員および準会員で、当該年度 8 月 31 日までに会費を納入済みでなおかつ会員資格を有していること。

2. 投稿の種類

絵本に関する研究論文、研究ノート、論説で未発表のもの。

【研究論文】研究の視点や手法、理論展開および結論に独創性や説得力が高く認められるもの。

【研究ノート】研究の基礎データになる資料調査・実践など報告、あるいは理論構築の可能性が認められるもの。

【論説】学術的な論で、注目すべき研究・作品・作家・展覧会・活動を取り上げての評論など。

3. 投稿原稿の採否

- 1) 査読に基づき、紀要編集委員会が採否を決定する。必要に応じて紀要編集委員の外に査読を依頼する。
- 2) 紀要編集委員会は執筆者に内容の修正を求める場合がある。
- 3) 採否の結果は翌年 1 月末までに執筆者に通知する。執筆者は採否の結果について説明を求めることができる。この場合、紀要編集委員会は申し出内容を精査の上、適正範囲内で回答する。

4. 執筆要領

執筆は別に定める「執筆要項」（絵本学会ホームページに掲載）に則ること。

5. 著作権

- 1) 『絵本学』に掲載される論文等の著作権は執筆者に帰属する。執筆者は掲載決定後、絵本学会に、著作権のうち複製権の行使を再許諾権付きで許諾するものとする。

- 2) 論文等に引用される文章、図版、写真等の著作権に関する事項は執筆者の責任において処理すること。

6. 研究倫理

- 1) 研究は「絵本学会倫理綱領」に基づき、十分な倫理的配慮の上に行うこと。
- 2) 個人事例を取り上げる際には、個人情報や秘密を保護することに配慮する。研究対象者・保護者・所属長、研究協力者などから承諾を得、論文等にその旨を記載する。

7. 投稿締切日

当該年 9 月 30 日（必着）

8. 刊行

当該年度内

9. 原稿の送付

- 1) 原稿は電子データをメールに添付して送付する。
- 2) 原稿送付先：絵本学会紀要編集委員会（メールアドレスは別に指定）

規程の改廃は理事会の審議を経て決定される。

改正日 2024 年 8 月 8 日



研究委員会からのお知らせ

◎ 2025 年度絵本学会研究会開催のお知らせ

研究委員会では、会員の皆さまの絵本研究の発展をサポートできるよう、絵本研究会を開催しております。研究発表および作品発表を募集し、口頭発表会として実施する予定です。研究成果の発表の機会としてご活用いただきたく、皆さまのご応募をお待ちしております。

2025 年度絵本学会研究会

日時：2025 年 11～12 月頃（予定）

募集期間：2025 年 8～9 月頃（予定）

募集内容：研究発表および作品発表。絵本学・絵本文化研究にかかわるもの（口頭、文書等を含め未発表のもの）。

募集の詳細・日程・発表者については絵本学会ホームページの「研究会」の欄にてお知らせいたします。ぜひ以下の QR コードのホームページから詳細をご確認いただき、奮ってご応募ください。応募多数の場合は、審査をすることがあります。



<https://ehongakkai.com/kenkyu/kenkyu.html>

日本絵本研究賞運営委員会からのお知らせ

第6回日本絵本研究賞・日本絵本研究賞特別賞

絵本についての優れた論文、評論、報告及び著書の推薦を募集します。

【2025 年次推薦募集の概要】

賞の区分：研究賞＝学会員による論文等、特別賞＝公刊書籍

募集期間：2025 年 11 月中

推薦対象：2025 年 9 月 30 日までの1年間に発表されたもの

推薦資格：絵本学会員（2025 年 10 月 1 日時点）

推薦宛先：info@ehongakkai.com

推薦書式：絵本学会ホームページより入手

【経緯】

絵本学会では、1997 年からの創立 20 周年を記念して、絵本研究や評論活動のさらなる活性化を図るため、「日本絵本研究賞」を創設しました。

絵本学会の主催する本賞が、より一層、今後の絵本研究の発展や深化に寄与することを目指し、2023～2024 年の日本絵本研究賞運営委員会および絵本学会理事会において見直しの検討を行いました。その結果、第 6 回の本賞では以下三点が変更されています。

- 1) 研究賞および奨励賞は、対象期間内に学会・大学・博物館・美術館の紀要、雑誌、展覧会図録などに発表された絵本学会員の単独または共同執筆による論文・評論・報告を対象とする。
- 2) 特別賞は、特にすぐれた絵本研究や評論活動として認められる、対象期間内に公刊された図書を対象とする。
- 3) 賞金を増額する。
 - ・日本絵本研究賞：5万円→10万円
 - ・日本絵本研究賞奨励賞：3万円→5万円
 - ・日本絵本研究賞特別賞：5万円→10万円

日本絵本研究賞・日本絵本研究賞特別賞は、論文等、著書に文字数の制限無く、対象期間内に発表された絵本研究の中から、最も優れた作品を選び、表彰します。絵本学会は、学会員の協力を得ることにより、この賞が日本の絵本研究と絵本学会の発展につながることを確信して、全力で取り組んでいきます。会員の皆様からのたくさんの推薦をお待ちしています。

◎主催 絵本学会

◎賞の種類

「日本絵本研究賞」（以下研究賞とする）：絵本研究や評論活動に関するすぐれた論文等に対して与えられます。今後に期待できる意欲的な論文等に対しては日本絵本研究賞奨励賞が与えられます。

「日本絵本研究賞特別賞」（以下特別賞とする）：絵本研究や評論活動に関する特にすぐれた著書に対して与えられます。

◎賞の対象

2023年10月1日～2026年9月30日の期間内に発表された、絵本についての研究論文や評論、報告（実践、調査報告）。

＊ブログ、SNS、個人的な趣の強い発表などは除きます。研究賞は、学会・大学・博物館・美術館・文学館等の紀要、展覧会図録などに発表された論文、評論、報告のうち、絵本学会員による単著または共著によるものを対象とします。紀要などへの掲載回数や文字数は問いません。特別賞は、上記期間に公刊された著書を対象とし（絵本学会員でなくてもかまいません）、特に優れていると認められる場合に授与します。

◎2025年次推薦（自薦及び他薦）受付期間

2025年11月1日（金）～11月30日（土）必着。

対象：2024年10月1日～2025年9月30日の期間に発表された論文、評論、報告及び著書

◎推薦宛先： info@ehongakkai.com

◎問い合わせおよび郵送先

〒430-8533 静岡県浜松市中央区中央2-1-1

静岡文化芸術大学 2F 事務局 かわこうせい研究室 気付

「日本絵本研究賞運営委員会」受付 宛

e-mail： info@ehongakkai.com

推薦方法等は絵本学会ホームページでも公開します。

◎推薦資格

・絵本学会会員。2025年10月1日時点で入会手続きが完了していることとします。

◎推薦方法・推薦規程

- ・推薦に際しては絵本学会ホームページから所定の書式をダウンロード、ご記入の上、Eメールに添付してお送りください。送付先を明記した封筒には「日本絵本研究賞」と朱書きしてください。
- ・研究賞は、推薦される論文・評論・報告の著者名、タイトル、掲載誌（掲載 URL）、出版社（発行者）、出版年月等を明記し、

200～300字程度の推薦理由を付けてお送りください。紙媒体のみ、ウェブにて一般公開されていない、などの場合には、文章の抜き刷りデータやスキャン画像等を添付してお送りください。

- ・特別賞の場合は、著者名、タイトル、出版社（発行者）、出版年月等を明記し、200字～300字程度の推薦理由を付けてお送りください。自薦の場合は、該当の著書1冊をお送りください。（返却希望の場合は、返送先を明記したレターパック等を同封してください。）
- ・自薦・他薦は問いません。
- ・それぞれについて、お一人で複数の推薦をすることが可能です。
- ・メールによる問い合わせの際には、「日本絵本研究賞」と但し書きをしてください。

◎入賞発表

2027年の絵本学会大会で発表します。

◎表彰

日本絵本研究賞、日本絵本研究賞特別賞の表彰式は2027年開催予定の絵本学会大会において举行します。

◎賞

日本絵本研究賞：賞状及び賞金10万円

日本絵本研究賞奨励賞：賞状及び賞金5万円

日本絵本研究賞特別賞：賞状及び賞金10万円

◎受賞作品の掲載

受賞作品の要旨を、直近で発行予定の『絵本学会NEWS』、あるいは機関誌『絵本BOOKEND』に掲載します。

◎選考委員

理事会において「第6回日本絵本研究賞・日本絵本研究賞特別賞」の新たな選考委員の選任を行います。決定しだいお知らせします。

絵本学会理事会議事録

2024年度 絵本学会 第5回理事会 議事録

日時：2025 年 2 月 28 日（金）17:00 ～ 19:30 オンライン

出席：水島 尚喜（会長） 穴澤 秀隆 生駒 幸子

かわ こうせい 佐藤 博一 竹内 美紀 永井 雅子

馬見塚 昭久 山本 美希

出席：松本 猛（議事 1 のみ）

欠席：宮崎 詞美

会長より開会挨拶の後、以下の項目順に議事が進められた。

◆ 前回議事録の承認

2024 年度第 4 回絵本学会理事会議事録および 2024 年度第 7 ～ 9 回メール審議議事録が承認された。

◆ 審議事項・協議事項

1. 第 28 回（2025 年度）絵本学会大会・総会について

穴澤理事（大会実行委員会事務局長）より、大会テーマを「絵本の窓から世界を見る」として横浜で開催される第 28 回絵本学会大会について、参加費、特別イベント、スペシャルトーク、懇親会、ラウンドテーブル、など実行委員会による企画概要の詳細が広報原稿とともに紹介された。

松本猛実行委員長より、引き続き水島会長とも情報共有を行い、準備万全で大会を成功させたい旨の発言があった。

今回の大会では参加費納入に Peatix を使用し、事前決済とするが、その準備と運用のため正木賢一会員（東京学芸大学）、広報物制作のため博多哲也会員（玉川大学）の両氏を実行委員として追加委嘱する旨が確認された。

続いて、研究発表 8 件、作品発表 3 件のエントリー内容を確認した。全ての発表申し込みを承認し、研究発表は大会 2 日目午前中に 2 室で実施、その後作品発表（口頭発表）を 1 室で実施することとなり、それぞれの座長も決定した。

総会の開催案内は、一般にも公開される大会参加申込（Peatix）には含めず、4月の学会 NEWS 配布時に別紙で出欠確認用の GoogleForms を知らせる旨、事務局より提案があり、実施方法の細部、回答率向上のための施策について意見交換の後、承認された。

2. 第 29 回（2026 年度）絵本学会大会について

竹内理事より第 29 回絵本学会大会の開催地を北海道上川町とする旨の提案があった。教育委員会管理の施設利用における実現可能性と運営体制について、竹内理事が中心となって検討を進めることとなった。

3. 紀要編集委員会より

馬見塚理事より紀要『絵本学』の電子アーカイブ化推進について確認があり、水島会長から権利関係の問題に注視しつつ時間をかけて合意形成を行い慎重に進めることが今後の方針である旨、回答があった。

今号（第 27 号）から導入された「絵本研究参考文献目録」と「絵本原画展ならびに絵本に関連する展覧会リスト」は先行して紙媒体から PDF データに移行し、絵本学会ウェブサイトで紀要発行時に公開する。

4. 日本絵本研究賞の選考にかかる諸規程

かわ理事よりあらためて文書整理された「日本絵本研究賞規則」および「日本絵本研究賞選考規則」の案が提示され、承認された。

上記規程は絵本学会 NEWS で会員に告知するとともに、ウェブサイトで公開する。

また関係者間で共有する「日本絵本研究賞関連内規」の内容についても確認された。

5. 30 周年事業に向けて

水島会長より、学会創立 30 周年（2027 年度）に向けて、記念冊子「30 周年のクロニクル」（紀要、機関誌、NEWS などから抽出された情報より構成された年代記）の制作、市販書「絵本研究倫理ガイドブック」「絵本学を学ぶ人のためのガイドブック」「絵本学用語集」などの刊行が提案され、編集・制作等の外部委託も含め、今後の継続審議となった。

6. 入会者の承認

1 月度、2 月度の入会申込者 8 名が承認された。

7. 退会者の承認

2024 年度末での退会希望者 18 名が承認された。（会員種別ごと 50 音順・敬称略）

【正会員】 石川 素子、阿久根 千賀子、石津 由美、石橋 幸子、伊豆田 麻子、宇恵 明日美、内田 絢子、大竹 紀美代、梶浦 恭子、栗岡 洋美、佐々木 豊、杉上 佐智枝、高橋 理枝、広松 由希子、松方 路子、村上 康成、以上 16 名

【準会員 a】 古村 充瑠菜、以上 1 名

【準会員 b】 金 知栄、以上 1 名

8. 後援の承認

以下の展覧会に対する名義後援について承認された。

・「2025 年春展 たのしいイソップ童話の世界」（軽井沢 絵本の森美術館）

・「ちひろのアルバム」（ちひろ美術館・東京）

・「戦後 80 年 ちひろと世界の絵本画家たち 絵本でつなぐ『へいわ』」（安曇野ちひろ美術館）

◆ 報告事項

1. 各専門委員会より

① 企画委員会（永井理事）

2025 年 2 月 23 日に筑波大学東京キャンパスで「絵本フォーラム 2024」が開催された。参加申込者数は 54 名（会員 35 名／一般 19 名）。当日は公共交通機関の事故のため欠席者もあったが、充実した内容に参加者の満足度は高く好評だった。

② 紀要編集委員会（馬見塚理事）

学会紀要『絵本学』27 号は、研究論文 2 本、研究ノート 1 本で、本体が 44 ページとなった。

③ 機関誌編集委員会（竹内理事）

大会開催に合わせて『絵本 BOOKEND 2025』は 6 月 6 日刊行予定で鋭意進行中。

④ 研究委員会（山本理事）

2024 年 11 月 16 日に一橋大学で「2024 年度絵本研究会」が開催された。参加者は会員 47 名、一般 2 名、委員 3 名で、会場定員 55 名に対し適切な規模で 7 組（11 名）の口頭発表が行われた。今回のような形式での発表機会を希望する意見も多く、大会等、他の行事との関連も精査し、今後の実施方法を向上させたい。

次号の学会 NEWS で 2025 年度研究助成応募申請要項を掲載予定。

⑤ 広報委員会（事務局代読）

絵本学会 NEWS 81 号の発行にあたり、原稿締め切り等のスケジュールを共有した。

新入会員の紹介は 82 号で行う。

⑥ 日本絵本研究賞運営委員会（かわ理事）

2025 年 2 月 10 日に第 6 回 1 期日本絵本研究賞審査（一次選考）を実施した。その結果、4 点が選出された。

2. 事務局より

- ・各専門委員会の 2024 年度決算に対する依頼
- ・絵本学会の慶弔規程、交通費規程の策定に向けて、事務局から提案できるよう準備開始
- ・寄贈資料『絵本から学ぶ韓国の文化』『いわさきちひろ写真目録』『降谷なな絵本原画展開催報告』

2025 年度 絵本学会 第 1 回メール審議 議事録

日時：2025 年 5 月 6 日（火）発信／5 月 20 日（火）追加再送

回答：水島 尚喜 穴澤 秀隆 生駒 幸子 かわ こうせい

佐藤 博一 竹内 美紀 永井 雅子 馬見塚 昭久

山本 美希 宮崎 詞美

◆ 審議事項

1. 新入会員について

以下の方（敬称略）からの新入会申込の審議について過半数の承認により可決された。

【正会員】 小柳 美和、三浦 良文、高橋 一元、花坂 歩、安藤 理恵子、坪井 晶子、河合 奈保子、河野 唯里、西川 奈美、朴 英娥、更家 なおこ、以上 11 名

【準会員 b】 上村 仁美、劉 一昂、横尾 亜美、以上 3 名

2. 入会承認の取り消しについて

2024 年度の入会申込に対して、理事会で承認後に諸費用入金の案内を送ったが、未手続きのまま年度末を迎えた 4 名について、入会承認を取り消すこととなった。

該当者に上記を伝えたとうえで、入会を希望する場合には再度の申込が必要であることを連絡する。

3. 名義後援

以下の展覧会后援について絵本学会の名義使用が承認された。

- ・《第 13 回武井武雄記念日本童画大賞》イルフ童画館
- ・《ヒロシマ・トマト 司修展》ちひろ美術館（東京／安曇野）
- ・《イソップ童話とどうぶつ絵本》軽井沢絵本の森美術館
- ・《てなわけで 20 年。魅惑のチョウ、シンタ展》安曇野ちひろ美術館
- ・《戦後 80 年 ちひろと世界の絵本画家たち 絵本でつなぐ「へいわ」》ちひろ美術館・東京
- ・《2025 年公募展：第 42 回 日産 童話と絵本のグランプリ》大阪国際児童文学振興財団

2025 年度 絵本学会 第 1 回理事会 議事録

日時：2025 年 6 月 7 日（土）17:00 ～ 19:20 オンライン

出席：水島 尚喜（会長） 穴澤 秀隆 生駒 幸子

かわ こうせい 佐藤 博一 竹内 美紀 永井 雅子

馬見塚 昭久 宮崎 詞美 山本 美希

会長より開会挨拶の後、以下の項目順に議事が進められた。

◆ 前回議事録の承認

2024 年度第 5 回理事会議事録および 2025 年度第 1 回メール審議議事録が承認された。

◆ 審議事項

1. 第 28 回（2025 年度）絵本学会大会について

大会実行委員会事務局の穴澤理事より、準備状況が報告された。

図書館、マスコミ関係者にわたって大規模な広報活動を進めたこともあり、現段階での参加申込人数が約 290 名で、当初目標は達成できている。当日配布のプログラム冊子の制作スケジュール、大会 2 日間の詳しいタイムスケジュール、役割分担案など細部の情報も共有された。

大会直前の実行委員会を 6 月 13 日に開催し、より万全の準備にあたることが報告された。

2. 第 29 回（2026 年度）絵本学会大会について

竹内理事より、第 29 回大会（北海道上川町）の準備状況が共有された。

開催日程は 2026 年 6 月 27・28 日、あべ弘士に講演の承諾を得ていることが報告され、横浜大会の閉会式では上川町教育委員会担当者が町長のメッセージを紹介し、参加勧誘を行う。

また、第 29 回大会は上川町教育委員会の共催となる方向性が承認され、上川管内への告知も開始される。

事前イベントを兼ねて、竹内理事が 10 月に旭川市中央図書館、12 月に上川町で絵本講座を開催予定。9 月に水島会長が講師を務める北海道立旭川美術館《かがくいひろしの世界展》のオープニング記念特別講演会でも告知されることになった。

3. 各専門委員会の 2024 年度活動報告、2025 年度活動計画および予算案について

第 27 回定期総会の資料を参考として専門委員会の 2024 年度活動について委員長より報告があった。総会資料に記載する事項については、研究委員会、日本絵本研究賞運営委員会から原稿提出がある旨が確認された。

2025 年度活動計画および予算増減の必要性について確認された。

- ・大会運営補助金は、会場費の必要性や物価高騰などをふまえ、55 万円に増額
- ・研究紀要の印刷製本費（2025 年 4 月発行分）はすでに請求額が確定しているため、実態に応じて減額
- ・専門委員会活動費は、活動計画に応じて増減
- ・その他、必要項目は事務局で精査して予算案を作成

4. 第 28 回定期総会について

- ・当日は上記 3 の内容を総会資料として作成し、配布する。
- ・総会の開会に先立ち、2 月にご逝去された名誉会員の吉田新一先生を哀悼し黙祷を行う。
- ・GoogleForms による出欠の回答状況は、6 月 7 日時点で出席約 40 名、委任状提出による欠席は約 130 名である。
- ・審議事項として、会則変更を議案に加える。第 3 条（活動）に「日本絵本研究賞および各賞の授与」を追記する。
- ・名誉会員については 2025 年度の追加を行わない。

5. 入会者の承認

直近の申込者 4 名のうち、準会員区分で申請のあった 1 名は学生身分の証明書を提出するよう事務局から連絡しているが、返信がないため保留とし、ほか 3 名の入会申請が承認・受理された。

【正会員】 Li Siyan（リシケン）、吉田 愛、松戸 結佳、以上 3 名

なお、今後の新入会者名の公表時期は、入会手続き完了後、学会 NEWS 刊行時に行うことを検討する。

6. 後援の承認

齋木喜美子会員から 2025 年 4 月に刊行された『絵本で読み解く 保育内容 言葉』の献本があり、大会でチラシを配布することが承認された。

7. 30 周年事業に向けて

学会ウェブサイトのリニューアル、ウェブサービスの充実と会員ページ作成、学会出版物のオンライン配信などについて、審議を継続した。

情報発信のネットワーク化も含めて学会運営のあり方にも言及する必要性が確認された。

◆ 報告事項

1. 各専門委員会より

① 企画委員会（永井理事）

2025 年度の絵本フォーラムを企画し、「いま絵本に求められているもの」をテーマに準備が進められている。チラシのデザイナー紹介について依頼があった。

「2024 年度絵本フォーラム」の報告は、絵本学会 NEWS 82 号に掲載されることが報告された。

② 紀要編集委員会（馬見塚理事）

投稿規程、執筆要項を熟読せず投稿してくる方がいるので、HP での周知内容の検討を行う旨の報告があった。

③ 機関誌編集委員会（竹内理事）

『絵本 BOOKEND 2025』が完成し、第 28 回大会での販売が可能である旨が報告された。

次号『絵本 BOOKEND 2026』については、第 29 回大会開催に関連づけた「北海道特集」の編集活動を開始すること、近年ご逝去された作家の追悼企画も進めることが報告された。これらの編集作業にあたって委員 2 名の追加委嘱が行われることになり、会長名で委嘱状を発行することが確認された。

また、これまで毎号に掲載されていた記事「絵本研究動向（座談会）」については、編集・発行スケジュールと執筆者の方々との都合が合わないため、次号の掲載が難しいとの報告があり、検討の必要性が確認された。

④ 研究委員会（山本理事）

2025 年度研究助成について、6 月末までが募集期間であり、7 月中に委員会内で審査を行う旨、スケジュールが説明された。

⑤ 広報委員会（宮崎理事）

絵本学会 NEWS 82 号、83 号、84 号の制作スケジュールについて報告があった。

新入会者リストは事務局長補佐から送付することが確認された。

⑥ 日本絵本研究賞運営委員会

研究賞、特別賞については委員各位の短評とともに絵本学会 NEWS 81 号、学会ウェブサイトに掲載された。2025 年度のスケジュールについても説明があった。

2. 事務局より

- ・『絵本 BOOKEND』のバックナンバー販売（朔北社、ぶんしん出版）による売上金額について報告がなされた。
- ・入会承認後、その年度内に正式な入会手続きが行われなかった場合には、「入会承認取り消し者」として理事会議事録に記載する。
- ・入会申込者の承認後、入会手続き（入会金・年度会費の納入）を行った場合には、絵本学会 NEWS の事務局報告において「新入会者」として掲載する。

3. その他

- ・『絵本 BOOKEND』における「絵本研究動向（座談会）」記事については、意義深い座談会、また貴重な記事であるため、今後どのような形で継続可能かを執筆者の方々と相談していくことが必要であると確認された。『絵本 BOOKEND』に掲載されない場合であっても、『絵本学』に掲載される「絵本研究参考文献目録」の解説機会として、ほかの媒体での継続を検討していく。
- ・次回理事会は第 28 回絵本学会大会の開催後に日程を調整する。

会則変更

【改正前】

■第3条（活動）

本会は、前条の目的を達成するため次の事業を行う。

1. 研究会、交流会等の開催
2. 紀要、機関誌等の刊行
3. 内外の関連組織との交流、連携活動
4. その他目的達成に必要な事業

【改正後】

■第3条（活動）

本会は、前条の目的を達成するため次の事業を行う。

1. 研究会、交流会等の開催
2. 紀要、機関誌等の刊行
3. 内外の関連組織との交流、連携活動
4. 日本絵本研究賞および各賞の授与
5. その他目的達成に必要な事業

【上記改正による付則の追記】

本会則は令和 7 年 6 月 21 日から施行される。

以上

告知

展覧会（絵本学会後援）

《ヒロシマ・トマト 司修展》

2025 年 9 月 5 日～11 月 9 日

安曇野ちひろ美術館

《イソップ童話とどうぶつ絵本》

2025 年 6 月 26 日～10 月 6 日

ムーゼの森（軽井沢絵本の森美術館）

《てなわけで 20 年。魅惑のチョウ、シタ展》

2025 年 6 月 6 日～8 月 31 日

安曇野ちひろ美術館

《戦後 80 年ちひろと世界の絵本画家たち 絵本でつなぐ「へいわ」》

2025 年 7 月 26 日～10 月 26 日

ちひろ美術館・東京

作品募集（絵本学会後援）

《第 13 回武井武雄記念日本童画大賞》

2025 年 11 月 21 日応募締切

イルフ童画館（公益財団法人おかや文化振興事業団）

<https://www.ilf.jp/dogaawards/13th/>

作品募集

《令和 7 年度アイヌの絵本コンクール》

2025 年 8 月 29 日応募締切

益財団法人アイヌ民族文化財団

https://www.ff-ainu.or.jp/event/direct/r07_ehon_bosyu/

寄贈資料

『第 41 回 日産 童話と絵本のグランプリ 童話・絵本入賞作品集』

一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団(2025 年 4 月 1 日)

『2023 年度 全国図書グループ総覧』

公益財団法人 読書推進運動協議会（2025 年 5 月 1 日）

ヴィータウテ・ジリンスカイト（著）スタシス・エイドリゲーヴィ
チュス（絵）櫻井映子（訳）

『ロボットと蛾』

green seed books

櫻井映子様（2025 年 7 月 14 日）



新入会員自己紹介

千葉理平（東京学芸大学）

この度入会いたしました千葉理平と申します。現在は東京学芸大学に在学しており、20世紀ドイツ表現主義を中心に研究・学修を進めています。絵本に対しても美術史的視点でアプローチできないか、その可能性を探究していきたいと考えております。どうぞよろしくお願い致します。

堀口貴恵子（名寄市立大学図書館司書）

はじめまして。学会に入会させて頂きましてありがとうございます。私は北海道の北に位置する公立大学図書館に勤めております。約40年前に世界の絵本原画展でM. センダック、E. ル・カイン、E. カール、B. ワッツなど、たくさんの原画を見て衝撃を受け絵本にはまりました。学会に参加することによって、絵本を通した様々な学びを深め広げて、地域の人々に役立てることができたらと考えております。どうぞよろしくお願い致します。

森崎鉄也（佛教大学大学院）

大学院の修士課程で臨床心理学を専攻しています。「手づくり絵本」創作が作者に及ぼす自己探求プロセスをテーマに研究をすすめています。それは、絵本の創作が、有用なアートセラピーとして成立する可能性について探求するものです。また、自らもTETUの名で、「手づくり絵本」創作をライフワークとしています。お近くの図書館で、「かさおじさん」というタイトルの絵本があれば、手に取っていただけますと嬉しいです。

山内知恵子

（三島絵本をたのしむ会代表・静岡県子ども読書アドバイザー）

はじめまして。この度入会致しました山内知恵子です。幼稚園教諭、保育士を経て読み聞かせや講座で絵本を声で届ける活動をしています。また学校や保護者、図書館、行政と連携を取り情報共有の場を作っています。地域支援に関わる上でも絵本の持つ力と可能性が豊かな心を育てることに繋がっていることを感じています。絵本学会で学びを深めていきたいと思えます。どうぞよろしくお願い致します。

編集後記（50 音順）

第28回絵本学会大会では、大会実行委員の一人としてリーフレットや会場印刷物などの制作、プロジェクター投影、写真撮影など、裏方として活動の機会をいただきました。

そのプロセスの中で、様々な会員の方々と絵本、美術教育、ムナーリについて語り合うことができ、充実したひとときとなりました。ありがとうございました。

（博多哲也）

横浜大会お疲れ様でした！実行委員として関わらせていただき（十分な働きを果たせたか分かりませんが…）、バタバタしながらも楽しく充実した2日間となりました。対面開催ということもあって、久しぶりの顔ぶれにワクワクするとともに、会員以外の一般の方々とも出会いがありました。

また、懇親会では荒井良二さんと一緒にすることができて、たくさん刺激をいただきました。やはり学会大会の面白さは「絵本」でつながることですね！

来年の北海道大会も楽しみにしています♪

（正木賢一）

第28回絵本学会横浜大会では、大変お世話になりました。

重要文化財でもある横浜市開港記念館の佇まいを味わう間もなく、嵐のように過ぎ去った2日間でしたが、今こうして皆さまの玉稿を拝読し、とても懐かしく思い出しております。

相変わらず猛暑の日々が続きますが、皆さまどうかご自愛くださいませよう、お祈り申し上げます。

（松本由美）

2025年夏は、横浜大会に始まり熱い篤い暑い夏となりました。NEWS82号では、高まる絵本学会の熱気の記録、そして各委員会と事務局からの大切なお知らせを中心にみなさまにお届けいたします。

2026年は、北海道・上川町での大会開催です。

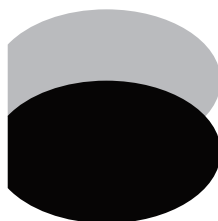
さわやかなお知らせは次号掲載を予定しております。

今号もご協力いただきましたみなさまに感謝申し上げます。

（宮崎詞美）

イラストレーション：博多哲也

※イラストレーションを許可なく無断転載、コピー、再配布することはご遠慮ください。



絵本学会